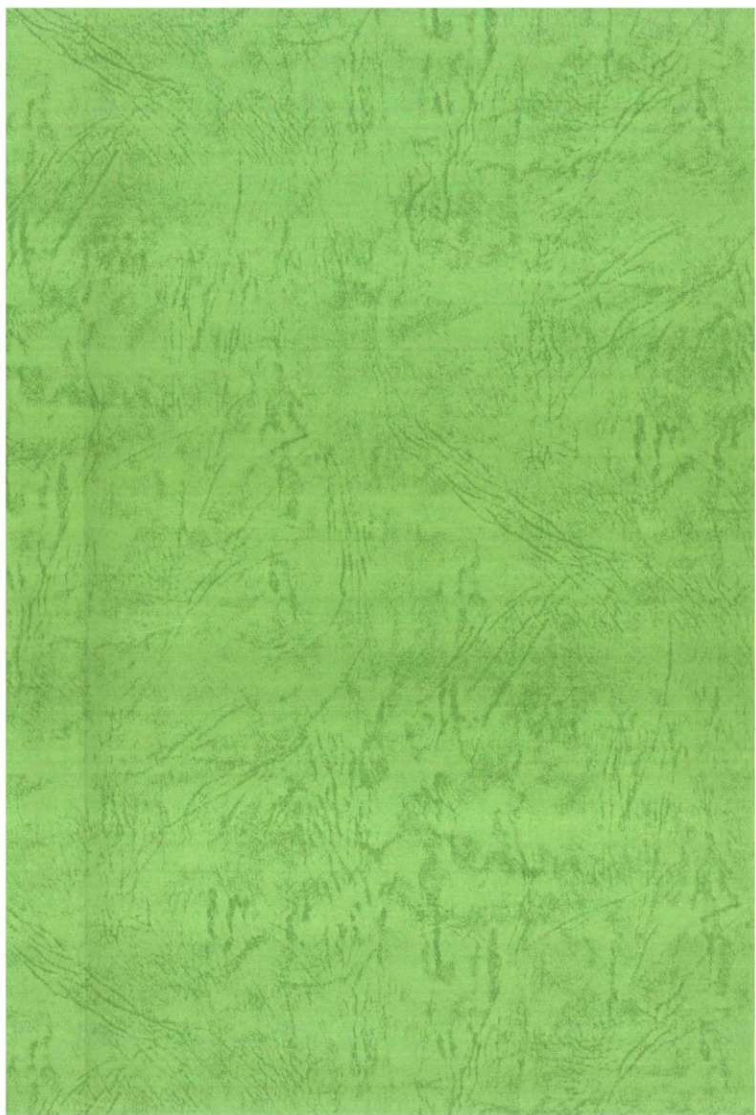


狐 塚 遺 跡
加治谷藪下五反畑遺跡

2021年3月

福崎町教育委員会



狐 塚 遺 跡
加治谷藪下五反畑遺跡

2021年3月

福崎町教育委員会

あ い さ つ

福岡町内ではほ場整備事業を計画立てて実施しており、町内各地で土地改良事業が進んでおりますが、それに伴い埋蔵文化財の発掘調査も行ってきました。その結果、町内の歴史が徐々に紐解かれてきている状況にあり、その成果をみなさまに公開していく必要があると感じております。このたび、令和元年度に実施した高岡福田地区ほ場整備事業に伴う狐塚遺跡の発掘調査及び田原東部地区ほ場整備事業に伴う加治谷藪下五反畑遺跡の発掘調査成果をまとめ、報告書を刊行いたしました。地域の歴史を知る資料として、広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり地元関係者をはじめ多くの方々に、ご理解とご協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。

令和3年3月

福岡町教育委員会
教育長 高橋 渉

例 言

1. 狐塚遺跡は、令和元年度に行った発掘調査である。
2. 加治谷藪下五反畑遺跡は、平成7年度に行った発掘調査である。
3. 調査は事業主の依頼を受け、福岡町教育委員会を主体とし実施した。
4. 確認調査は国庫補助金を充て、本調査経費は事業主体者が負担した。
5. 本書に使用した方位は、基本的に磁北を示している。
6. 本書に掲載した図のうち、遺跡位置図は福岡町発行の都市計画図を編集したものである。
7. 本書の執筆、編集は梶、福永、原井川、常陰の協力を得て樋口、渡辺が行った。
8. 出土遺物の整理は梶、福永、原井川、常陰が行い、写真撮影は樋口、渡辺が行った。
9. 本報告に係る図面、写真、遺物等は福岡町教育委員会にて保管している。
10. 調査及び整理作業には、数多くの方々や機関にご指導、ご助言をいただいた。感謝申し上げます。

本文目次

あいさつ・例言

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 試掘確認調査の経過	1
第3節 本発掘調査の経過	2
第4節 整理作業の経過	2
第5節 位置と環境	3

第2章 北工区試掘確認調査結果

第1節 調査の方法	5
第2節 調査結果	5
第3節 出土遺物	13

第3章 狐塚遺跡

第1節 1区の調査結果	15
第2節 2区の調査結果	18
第3節 3区の調査結果	19
第4節 4区の調査結果	19
第5節 出土遺物	21
第6節 小結	21

第4章 加治谷敷下五反畑遺跡

第1節 調査に至る経緯と方法	24
第2節 遺跡の位置と周辺の遺跡	25
第3節 全面調査	25
第4節 出土遺物	27
第5節 まとめ	29

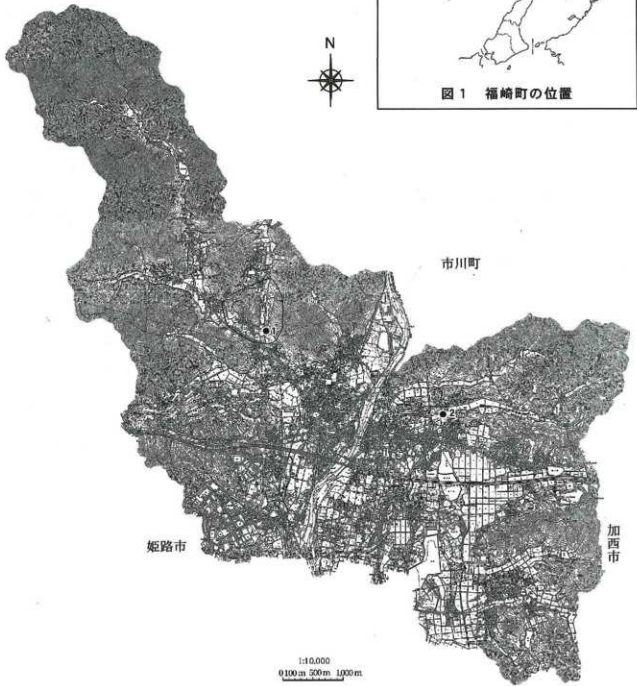
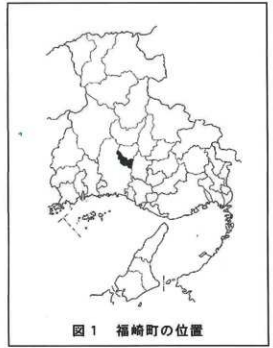


図 2 調査地位置図 1 狐塚遺跡 2 加治谷敷下五反畑遺跡

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

福岡町では高岡福田地区においてほ場整備事業を計画された。事業地内には周知の埋蔵文化財包蔵地である観音堂遺跡・宮ノ前遺跡・前田遺跡・林谷遺跡・狐塚遺跡が存在する。それ以外の遺跡の存在も想定されたので、事業用地内の分布調査を実施した。その結果を基に試掘確認調査を実施することとなった。社会教育課と農林振興課の間で調査方法や期間などについて随時協議を行ってきた。平成27年度から分布調査を開始し、平成29年度に終了した。分布調査は、玉田誠司・樋口 碧・渡辺 昇・梶智美が担当した。分布調査の結果、休耕田などがあり表面観察が十分に行えない地域が多かったが、桜遺跡周辺を中心に遺物が採集された。狐塚遺跡周辺から塩田池にかけては条件が悪かったが、狐塚遺跡南東部で遺物が採集された。段丘面が延びていることから遺跡周辺部にも遺跡が広がっている可能性が高いと思われたので、試掘調査を追加して実施することとした。

第2節 試掘確認調査の経過

分布調査成果をもとに試掘確認調査を行った。平成29年度に調査を実施した。平成28年度は主に南工区を、平成29年度は北工区を対象とした。一部平成28年度に耕作の都合などで未調査となっていた地点や調査範囲を確定するための追加調査を南工区についても平成29年度に実施した。調査で設定した坪は南工区で229か所、北工区で100か所になる。その中には諸事情や周辺の調査成果から調査していない坪も一部含まれる。耕作物の都合などで大きく2期（前期は主に主作部分）に分けて調査を実施した。平成29年9月25日（月）から順次試掘調査を行った。耕作物の都合などにより、調査日を決定したので、調査日が開いている場合もある。試掘確認調査なので、費用は全額埋蔵文化財補助金を充てた。

狐塚遺跡の確認調査は平成29年度に実施した。その結果、包蔵地の範囲周辺にも遺構・包含層が広がっていることが確認され、遺跡の存在が確実になった。ほ場整備事業に先立って調査が必要となることから、協議を重ねることになった。平成30年度にはほ場整備の実施設計が行われ、踏査実施や設計変更などの協議を行った。

試掘確認調査結果から、遺跡範囲で削平されるもしくは影響を受ける地域について本発掘調査を実施することとなった。

調査体制

調査主体	福岡町教育委員会
教 育 長	高奇十郎
社会教育課長	大塚久典
社会教育課副課長	福永知美
社会教育課主事	樋口 碧
埋蔵文化財専門員	渡辺 昇
整 理 作 業 員	梶 智美
整 理 作 業 員	福永明子



調査風景

第3節 本調査の経過

令和元年度から工事計画に即して本発掘調査を実施することとした。令和元年度は北工区の一部である塩田池北側部分と桜奥池西池周辺部から本体工事を着手する計画になっていた。それに先立って林谷遺跡と令和2年度施工予定の狐塚遺跡の調査を実施することとなった。今年度耕作予定の田畑もあることから、耕作に合わせて調査を行った。狐塚遺跡1区を令和元年6月5日から開始し、狐塚遺跡2区・3区、林谷遺跡1区・2区・3区へと移り前半の本調査を終えた。後半は稲刈り後に行い、林谷遺跡4区、狐塚遺跡4区の調査を行った。林谷遺跡4区は来季も耕作を行うことから埋戻しを行った。それ以外の調査区は安全性を保つために一部埋戻しを行った。本調査の間に一部試掘確認調査も実施し、合わせて観音堂遺跡（第2次）の本発掘調査も実施した。観音堂遺跡の埋戻し作業を3月9日（月）に終え、令和元年度の調査を終了した。発掘調査工事は前期を株式会社マツダ建設が後期を安西工業株式会社が請け負ったが、一部（農家負担分）は文化財補助金を充当し直接雇用もしている。ドローン撮影と基準点測量は株式会社ジオテクノ関西に委託した。

調査は兵庫県中播磨県民センター姫路土地改良センターと委託契約を交わし実施した。農家負担分については文化財補助金を充てた。各調査区の調査期間は下記の通りである。

狐塚遺跡1区	2019(令和元)年6月4日～6月20日(実働11日)
狐塚遺跡2区	2019(令和元)年6月17日～6月28日(実働10日)
狐塚遺跡3区	2019(令和元)年6月24日～6月26日(実働3日)
狐塚遺跡4区	2020(令和2)年1月14日～1月24日(実働8日)

調査体制

調査主体	福岡町教育委員会
教 育 長	高奇十郎
社会教育課長	大塚久典
社会教育課課長補佐	中塚喜博
社会教育課主査	長谷川幸子
社会教育課主査	樋口 碧
埋蔵文化財専門員	渡辺 界
整理作業員	梶 智美
整理作業員	福永明子
整理作業員	原井川奈美

調査参加者

岩木範行・宇崎幸久・大杉武司・大杉ひとみ・大西俊三・大野武二郎・尾崎幸忠・岡田良明・北山直樹・小寺敏樹・後藤土彦・後藤祐香・隅岡 弘・高原和則・中川茂俊・藤本正巳・藤原宗平・松岡武夫・松本 保・三木勝博



調査風景

第4節 整理作業の経過

試掘調査・本発掘調査と並行して随時整理作業も実施した。土器洗浄や遺構図の調整などの作業は平成30年度・令和元年度に行ったが、それ以降の作業と報告書発行は令和2年度に実施した。経費は令和2年度発掘調査と合わせて兵庫県中播磨県民センターと委託契約を交わして実施した。

調査体制

調査主体	福岡町教育委員会
教 育 長	高橋 渉
社会教育課長	松田清彦
社会教育課副課長	森 公宏
社会教育課文化財係長	藤原 元
社会教育課主査	長谷川幸子
社会教育課主査	樋口 碧
埋蔵文化財専門員	渡辺 界
整 理 作 業 員	梶 智美
整 理 作 業 員	福永明子
整 理 作 業 員	原井川奈美
整 理 作 業 員	常陸ひとみ



整理作業風景

第5節 位置と環境

狐塚遺跡は兵庫県神崎郡福岡町高岡字狐塚に所在する。福岡町域は市川の兩岸に展開しており、市川の支流が流れ開析された谷を形成している。狐塚遺跡は市川西岸に位置し、山塊は地質構造では丹波帯に属しており、周辺に段丘が存在する。南側の中国自動車道沿いに安富断層があり、東西方向の交通路となっている。市川沿いの南北方向の交通路に利用され、支流沿いの谷地形は各方向へのルートに利用されていたと思われる。谷地形は河川によって開析されたもので谷底平野になっており、周辺部は段丘である。狐塚遺跡は低位段丘にあたり、南側ならびに西側の低い部分は谷底平野にあたる。

福岡町では旧石器時代からの遺跡・遺物が確認されているが、市川西岸では今のところ確認されていない。縄文時代からの遺跡が知られており、矢口遺跡の不定形刃器が最も古い遺物である。サヌカイト製で風化度から古い時期と想定されている。同じ高岡地区では桜の林谷遺跡からも、石匙などの石器が採集されている。昨年の調査で落とし穴群が検出されているが、伴出遺物はなく時期は確定できない。弥生時代の遺跡も市川西側は調査数が少ないこともあって明確でない。駅前の中溝遺跡で中期の溝が、山崎の朝谷遺跡で後期の土器棺が出土している。終末の土器が宮ノ前遺跡・福田東田黒遺跡・西治下代ノ下モ遺跡や福田町田、馬田スガキで採集されている。昨年の中溝遺跡の調査で、弥生時代終末の竪穴住居が調査された。播磨に多い典型的な10

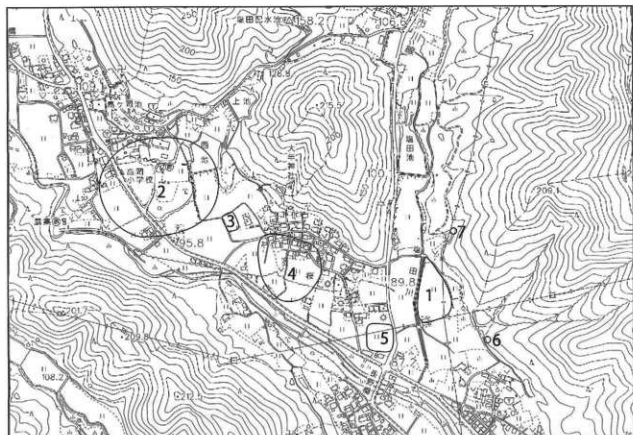


神谷古墳 (墳丘と石室) 写真

土坑を有する方形プランの住居である。西治下代ノ下モ遺跡では古墳時代になると集落を形成する。後期に製塩土器を保有している点も注目される。

古墳は福岡町内全域で確認されているが、明らかな前中期古墳は確認されていない。隣接する市川町奥の観音寺山古墳が前期の古墳である。古相の古墳は高橋にある。高橋古墳群で早い段階に鉄剣が出土したことで知られている。箱式石棺を主体部とする6基以上の小円墳で構成される。今のところ福岡で最も古い古墳と考えられている。姫路市香寺町片山古墳も同時期かと思われる。それに続くのが大貫に所在する相山古墳である。埴輪を巡らす町内唯一の古墳である。人物・駒・盾の形象埴輪も持っている。

次に築かれる古墳は山崎の大塚古墳である。30m前後の円墳で、長さ12mを超す大型の横穴式石室を主体部としている。そこから、馬ウ子古墳・福田古墳群へ拡散していく。土器館を出土した地点の隣接地に朝谷古墳群が遅れて築かれる。大塚古墳に続く大型の石室を保有する朝谷1号墳(狐塚)が残存している。神谷古墳も近い時期の古墳であるが高さが低くなり石室長が長くなっている。福田には東大谷古墳・宮山古墳・上垣内古墳・小山古墳の横穴式石室を主体部とする古墳があり、高岡には塩田山古墳・塩田山東古墳(桜谷古墳)・五郎が谷古墳が、山崎には馬ウ子古墳群、西治には三味谷古墳群・数可ノ古墳、高橋には佐本古墳が存在する。奈良時代の遺構は矢口遺跡の堀立柱建物であるが、遺物は宮ノ前遺跡・観音堂遺跡などで確認されている。中世の遺物も同様に広範に各地で採集されている。



1	狐塚遺跡	2	林谷遺跡	3	桜竹之後遺跡	4	桜遺跡
5	桜東畑遺跡	6	塩田山東古墳	7	塩田山東2号墳		

図3 狐塚遺跡の位置と周辺の遺跡

第2章 北工区試掘確認調査結果

第1節 調査の方法

分布調査結果などを元に試掘確認調査を実施した。調査は原則1筆に2×2mのグリッドを1か所設定したが、広い水田などは2か所設定したところもある。掘り下げは重機を用い、壁面平面の精査等においては人力で対応した。来季も耕作を行うことから、耕土は別に分けて横積みした。断面図や写真撮影などの記録を随時作成し、埋戻し作業も行った。

第2節 調査結果

狐塚遺跡 (No.1～No.11)

桜区東側県道前之庄市川線東側に位置している。七種川本流と分かれる谷入口部に立地する。東側は埴田山の丘陵になっており、福田と接している。No.1は5層から成り、耕土、黄灰粗砂、黄褐シルト質極細砂(細礫含む)、オリブ褐極細砂、褐シルト質極細砂(地山)となっている。第4層(オリブ褐極細砂)上面で大形の落ち込みを検出している。平面ではほぼ直線的に南北に延び、調査区外へ続いている。No.1で遺構を確認したことから、北側に新たにNo.1-1を追加設定したが、遺構は確認されなかった。近世以降の丹波焼が出土している。

No.2・3はNo.1の南側に設定した坪である。耕土、床土、第2層と第3層の混ざった層、黄褐極細砂、黄褐シルト質極細砂(粘性強い)、黄褐細砂、にぶい黄褐極細砂(地山、上面にマンガン層堆積)の7層から成っている。地山面にビット状の凹凸が検出された。断面でも確認されているが、断面形状・平面形状ともに不定形である。洪水などによる堆積状況かと思われ、明瞭な遺構とは思われない。No.4～7も堆積状況はNo.2とほぼ同じであるが、No.4・5は第6層の黄褐細砂が存在しない。4つの坪ともに地山面での凹凸が確認されず、No.2・3のように洪水などの強い流れの影響を受けなかったようである。

No.8～11は狐塚遺跡の南端に位置しており、全体に安定した遺構面を有している。No.8は6層から成り、耕土、床土、黄灰粗砂、黄褐シルト質極細砂(細礫含む)、暗褐極細砂、褐シルト質極細砂(地山)となっている。地山面で南側に延びる大形の落ち込みを検出している。坪の東西方向にも延びているので、検出長は東西2m、南北1m以上である。掘り下げは行っていないが、大形の溝の可能性が高い。中世の須臾器碗が出土している。No.9で遺構は確認できなかったものの遺構面は確認された。堆積状況はNo.8と同じである。土師器と陶器が出土している。No.10ではNo.8の第3層黄灰粗砂と第5層の暗褐極細砂が存在しない。地山面でビットを確認している。埋土は黒褐極細砂である。No.11も基本層序はNo.8に近いが第5層の暗褐極細砂が存在しない。No.10同様地山面でビットを確認しており、土師器が出土している。

狐塚遺跡中央部分は洪水などによって損壊を受け遺構面が残存していなかったが、南北両側では中世の遺構が確認された。



図4 試掘確認調査グリッド位置図

椽遺跡 (No.12～No.48)

椽区の南側に広がる遺跡である。No.12～16は遺跡南東部分に位置する。No.12は耕土、床土、暗褐色極細砂、灰黄褐色砂礫(地山)になっている。遺構・遺物は確認していない。No.15・16も同じ堆積状況であるが浅くなっている。遺構は確認されていないが、No.15の第3層暗褐色極細砂から土師器が1点出土している。逆にNo.13・14は堆積土が厚くなっており、礫が多く含まれている。全体的に洪水堆積層であろう。No.18～24も基本的にNo.12と同じ堆積で、洪水堆積で遺構・遺物は確認されていない。

No.25は耕土、床土、暗褐色極細砂、黒褐色極細砂、灰黄褐色砂礫(地山)と堆積しており、第3層暗褐色極細砂上面と地山面で遺構を確認した。上面の遺構は深さ20cmの土坑で、調査区西側に延びている。検出した幅は70cmを測る。遺物は出土していないが、床土下であることから近代など新しい時期と思われる。地山面で確認した遺構は落ち込みである。最大幅130cmを検出し西側に続いている。南北にも延びる落ち込みで検出長は2mを越える大溝状の遺構かと思われる。No.26～28もNo.25と同じ層序である。No.26・27では遺構は確認できなかったが、No.27は土師器が出土しており、遺構のある可能性が高い。No.28は南北に延びる幅75cm、深さ15cmの溝を確認している。No.30・32も同じ堆積であるが、水分が多く還元状態に近かったためか緑がかかった色調になっている。

No.34は黒褐色極細砂が存在せず、耕土、床土、暗褐色極細砂、灰黄褐色砂礫(地山)になっている。地山面で円形の落ち込みを検出した。やや歪な平面形状で径3m前後になろうかと思われる。深さは浅く、15～20cmを測る。No.35～41・43・44・46～48もNo.34と同じ土層堆積をしている。遺構が確認されたのは2か所であるが、ともに地山面でなく第3層上面で検出している。No.35は検出長1mの落ち込みで調査区外へ延びている。深さ40cmで底の形状は丸くなっている。No.37は径55cm、深さ34cmの土坑である。No.41から須恵器・土師器が出土している。

椽遺跡の遺構の残りは良好とは言えない。洪水堆積層が多く、遺構の検出は少なかった。No.25周辺とNo.35周辺だけに遺跡が残存していることが確認された。

林谷遺跡 (No.49～No.65)

No.49・50は県道南側である。No.49の層序は第1層耕土、第2層床土(暗灰黄シルト質細砂とオリブ褐シルト質極細砂の混じった層)、第3層にぶい黄褐色砂礫層で色調をわずかに変えるが50cm以上続いている。明瞭な地山は確認していないが、洪水堆積層で遺構は確認されず、遺物も出土していない。No.50はNo.49の床土の下に黄褐色シルト質極細砂が存在するが、その下は同様の堆積をしており、遺構・遺物は確認できなかった。

No.51～55は県道北側の水田部分である。No.49・50の北側で基本的に同様の堆積をしており、洪水堆積層で遺構は確認されていない。No.53で須恵器・土師器が出土しているが、流入したもので2次堆積である。No.51・52・55の西側はNo.49と同じ堆積であるが、東側の谷入口部のNo.53・54は堆積層が増え厚くなっている。

No.56～59は丘陵部南側の水田に位置している。No.56は耕土・床土・黄褐色シルト質極細砂・黄灰粗砂・黄褐色シルト質極細砂・オリブ褐細砂(地山)の6層から成っている。地山面で溝1条とピット2基の遺構を確認している。溝は南北に延びており、途中から南東方向に曲がっている。幅40cm、深さ30cmを測る。底は丸く、埋土は包含層である黒褐色シルト質極細砂であるが、遺物は出土していない。ピットの径は20cmと30cmで掘り下げは行っていない。No.57はNo.56の堆積状況と似ているが、地山上に暗褐色砂礫が挟まっている。暗褐色砂礫上面にはマンガンが堆積している。地山面以外にこの面にも遺構がみられる。両面ともに土坑を検出している。No.58も堆積状況はNo.56と

同様に地山面が遺構面と考えられる。No.57から須恵器が、No.58から土師器が出土している。No.59はNo.56の第3層黄褐シルト質極細砂が存在せず、第5層の下にオリブ褐極細砂、暗灰黄シルト質極細砂が堆積し、その下が地山である灰黄褐砂礫になっている。地山面に炭が広がっており、落ち込み・土坑・ピットを検出している。落ち込みは坪北東部の大きく落ち込むもので、自然地形かもしれない。土坑は不定形を呈しており、最大長70cmを測り、落ち込みに切られている。ピットは径20cmと25cmを測る。遺構面から土師器・須恵器が、上層から陶器が出土している。

No.60・61はNo.59の南西の水田で一段低くなっている。No.60は耕土・床土・にぶい黄褐シルト質極細砂・褐砂礫と堆積している。南側のNo.50などと同じ洪水堆積層になっており、遺構・遺物は認められなかった。林谷遺跡の県道沿いは旧河道かと思われる。

No.62～65は丘陵上の開墾部分である。南側のゲートボール場は林谷遺跡が知られることとなった縄文時代の石器(石匙など)出土地点である。No.62の層序は耕土・黄褐シルト質極細砂・オリブ褐細砂(地山)になっており、地山面で落ち込みを検出している。東から西に深さ20cm以上下がっており、坪の南北調査区外に延びている。No.63・64も同様な堆積をしているが、遺構・遺物は確認されていない。No.65はNo.62の北側である。耕土・床土の下が地山になっており、地山面で土坑・ピットが検出されている。

林谷遺跡の調査では、南側は旧河道などで遺構は確認されなかったが、他の地点では古代から中世にかけての集落跡であることが確認された。

桜遺跡～林谷遺跡間 (No.66～No.77)

No.66は林谷遺跡隣接地で、No.65の北東部に位置する。層序もNo.65と同じで床土下で地山になり、遺構が確認されている。ピットを1基北壁で検出している。No.67・68はさらに北側の水田部分で低くなっている。耕土直下が地山になっており、遺構・遺物は確認されなかった。No.69は桜上池改修工事のため、調査することが出来なかった。No.68よりもさらに低くなっていることから、遺跡は存在しないと思われる。

No.70～77は桜西池の南側の谷部に設定した坪で、谷中央部から東寄りに設定した。No.70は第1層耕土、第2層床土、第3層は緑灰中砂、第4層は第3層と第5層の混じった土層で、第5層は橙シルト質極細砂で地山である。遺構は確認されていない。No.71～74・76・77は床土の下に粗砂・砂礫の洪水堆積物が認められる。No.71だけは地山を確認しているが、遺構は認められない。それ以外は洪水堆積層が続いており、地山は検出していないものの遺構は存在しないと思われる。洪水堆積層には須恵器・土師器・陶器が少量含まれている。No.75だけ床土の下に褐細砂が洪水砂礫の上に堆積しており、遺構面になっている。4基のピットを調査している。古代の遺構で、桜竹之後遺跡とした。

桜遺跡～狐塚遺跡間 (No.78～No.83)

No.78は桜遺跡南東部の隣接地である。No.12の南側の水田で、層序は耕土、床土、黄褐砂礫、灰黄褐砂礫(地山)になっている。遺構・遺物は確認していない。No.79・80も同様の堆積をしており、洪水堆積を示している。No.79で陶器片が1点出土している。

No.81は耕土、床土、暗灰灰粗砂、黒褐シルト質極細砂、褐細砂(地山)の5層から成る。地山面で落ち込みと炭を検出している。落ち込みは坪北側に延びており、2m以上の大型になる。落ち込み肩部南で炭の集中する箇所が2つ確認された。第4層の黒褐シルト質極細砂は包含層で須恵器・土師器が出土している。No.82は耕土、床土、地山になっており、地山面でピットを1基確認した。土師器が出土している。No.83はNo.81と同じ層序をしており、包含層が厚く土師器が出土している。

明確な肩部を検出していないが、坪全体が遺構(落ち込み)ではないかと思われる。No.81～83の地域は遺構が検出され、新たな遺跡が確認され桜東知遺跡とした。

狐塚遺跡周辺 (No.84～91)

No.84～88は狐塚遺跡東側の高い部分に設定した坪である。No.84は耕土、床土、造成土、地山となっており、すべて人工的な層である。No.85は耕土、床土、オリーブ褐シルト質極細砂、黄褐シルト質極細砂、褐シルト質極細砂、黄褐シルト質極細砂(地山)になっており、遺構・遺物は確認されていない。No.88もNo.85と同様の堆積で、遺構・遺物は確認されていない。No.86は耕土、床土、褐シルト質極細砂(地山)で、地山面でピットを確認している。埋土が耕土であることから、近現代のピットと考えられる。No.87もNo.86と同様に地山面でピットを検出したが、近代以降のものと思われる。

No.89～91は狐塚遺跡南側部分に位置している。No.89は耕土、床土、盛土(山土)、褐シルト質極細砂、黄褐シルト質極細砂(地山)の堆積で、遺構・遺物は認められない。No.90は耕土、床土、黄褐極細砂、オリーブ褐極細砂、暗灰黄シルト質極細砂、オリーブ褐シルト質極細砂、オリーブ褐極細砂(地山)になっている。地山面で大きめのピットを1基確認した。径1m前後の不定円形を呈しており、須臾器・土師器が出土している。中世の遺構である。No.91はNo.90同様の堆積をしているが、地山面で遺構は確認されなかった。床土下でピットを1基検出したが、近代以降のものである。

塩田口 (No.92～100)

No.92～95は谷東側の水田部である。No.94だけ耕土、床土、黒褐粗砂、灰黄褐中砂(礫含む、地山)と堆積していたが、それ以外は耕土直下もしくは床土下が地山になっていた。

どの坪も遺構・遺物は確認されなかった。

No.96～100は谷西側の水田である。No.96は床土の下が地山になっており、遺構・遺物ともに確認されなかった。No.97は耕土、床土の下に黄褐砂礫層が数層厚く堆積している。1.8mまで掘り下げたが地山は確認されなかった。洪水堆積層で遺構は存在しない。No.98～100も色調が異なる砂礫層が堆積しており、遺構・遺物は確認していない。地山は確認していないが、遺跡は存在しないと思われる。

当初坪を設定し試掘調査を行う予定であったが、諸事情から以下の坪は調査していない。

No.17・29・31・33・42・45・69

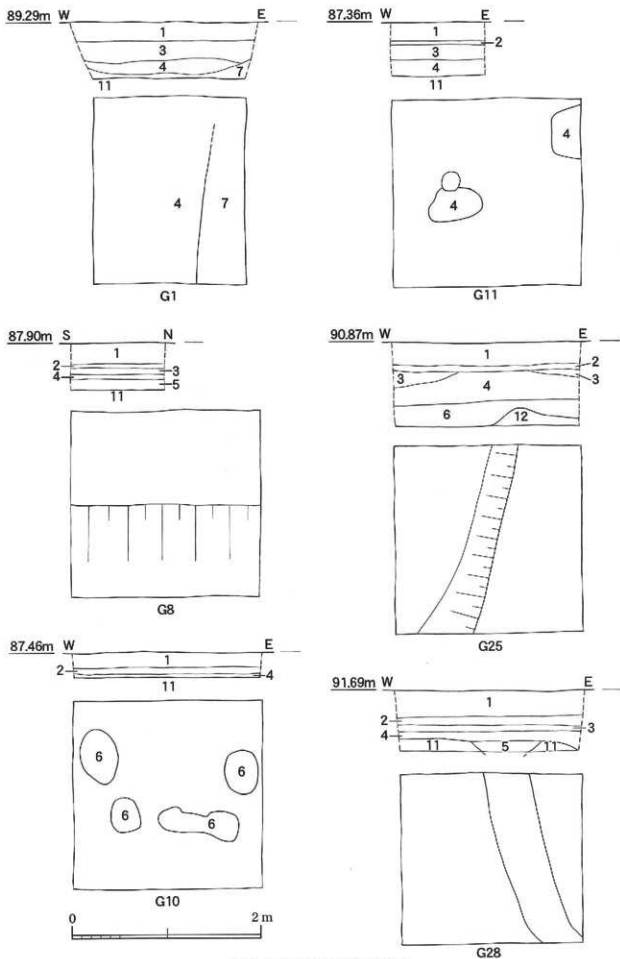


図5 試掘確認調査実測図(1)

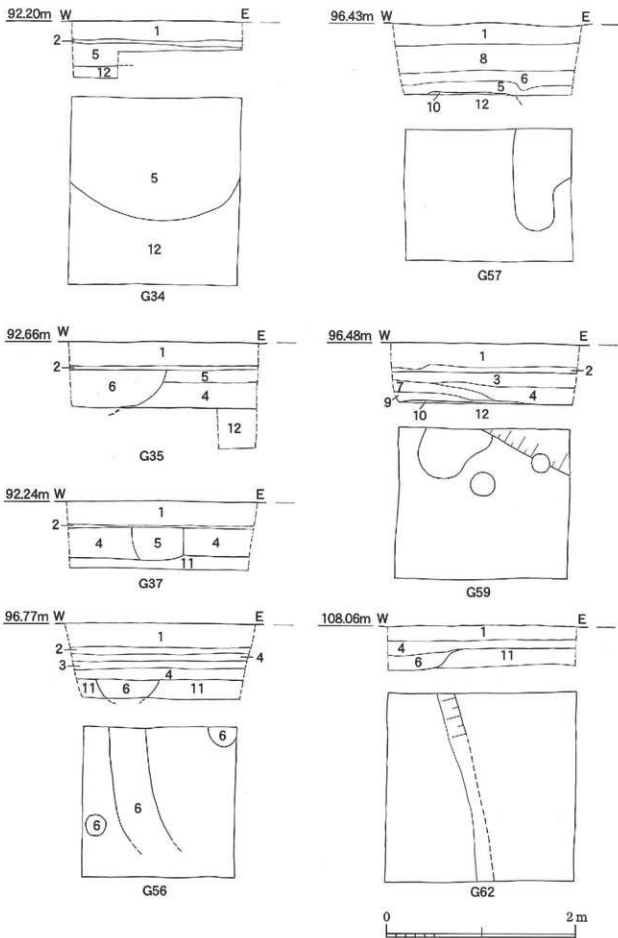


图6 試掘確認調査実測図(2)

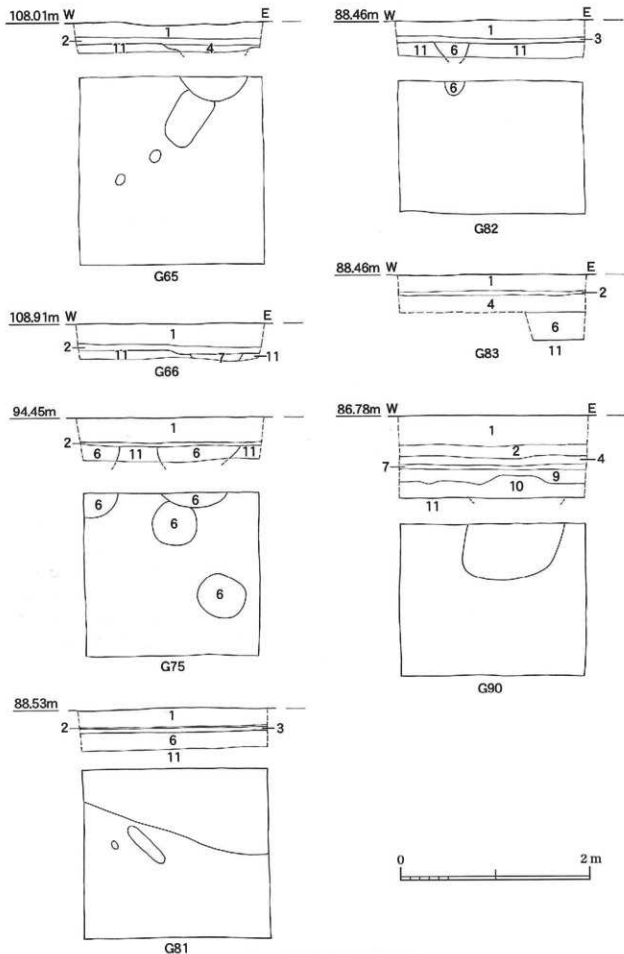


图7 试掘確認調査実測図(3)

まとめ

確認調査の結果、各遺跡全体で遺構は確認していないが、一部で明瞭な遺構を確認している。狐塚遺跡は中央部と北端は遺構の残りが悪かったが、北側の一部(No.1)と南側(No.8～11)で中世の遺構が確認された。桜遺跡は予想以上に残存状態が悪く、南西部分(No.34～37)と中央東側の一部(No.25)だけで遺構が確認された。中世の遺跡である。林谷遺跡北側(No.62～65)と南側(No.56～59)で遺構が確認されている。北側は台地部分であり、以前縄文時代の石器などが採集された地点の北側にあたる。今回の調査では古い時期のものは確認しておらず、旧出土地点隣接地は上面が削平されており、遺構は残存していなかった。南側は大形の遺構や炭・焼土を伴っている。古墳から中世にかけての集落跡であろう。

試掘調査の結果、林谷遺跡隣接地で遺構が確認され(No.66)、北東に遺跡が広がることがわかった。林谷遺跡と桜遺跡の間のNo.75だけ遺構を検出し、新たな遺跡(桜竹之後遺跡)を確認した。桜遺跡と狐塚遺跡の間では、桜遺跡南東の字東畑(No.81～83)で中世の遺跡を新たに確認した(桜東畑遺跡と呼称)。狐塚遺跡周辺ではNo.90で遺構が確認され、南東部に遺跡が延びていることを確認した。

今回の調査では林谷遺跡の南側で古墳～古代の遺構を確認した以外はすべて中世の遺構を検出した。ただ、1点だけ弥生時代に遡る可能性の高い土器があることや以前に林谷遺跡で縄文時代の石器が以前出土していることから、古代以前の遺跡が存在する可能性もある。

第3節 出土遺物

出土遺物量は少なく、コンテナ1箱である。図化した遺物は9点である。

1は土師器口縁部の破片で83G出土である。端部を玉縁状にしたあまり見ない器形である。端部は内面に折り曲げ、やや面になっている。小片であるが、復元すると口径13cm前後と思われる。胎土が粗いことから製塩土器かと思われる。玉縁状は全体に意図したものでなく部分的なものと思われる。2は59G出土の須恵器壺胴部である。焼成が悪く生焼けで土師器のように見える。外面はロクロナデで、内湾し小礫を胎土に含む。3は35G出土の須恵器杯蓋である。つまみ部と天井部の破片で生焼けである。天井部は平坦で、つまみ部は平坦でボタン状である。4は須恵器杯口縁部である。81G出土で外傾し端部丸く、胎土精良で焼成良好なことから古相を示すものと思われる。5も須恵器杯口縁部である。70G出土で内湾ぎみに外傾し端部丸い。器壁は厚めでロクロナデである。復元口径16cmとやや大きめである。6は90G出土の須恵器椀口縁部である。内湾し端部丸く、端部より下がやや厚くなっている。ロクロナデで重ね焼きの痕跡が残っている。色調は灰で4・5よりも淡い。7は内湾する須恵器椀底部で8G出土である。破片であるが、糸切りと思われる。8は丹波焼甕体部の破片で1-1G出土である。ロクロナデの凹凸が顕著である。9は59G出土の白磁碗口縁部である。端部は玉縁になっており、全体に施軸している。時期は1～5が奈良時代、6・7・9が平安時代末から鎌倉時代、8が近世以降と思われる。出土遺跡は狐塚遺跡が6～8、桜遺跡が3、林谷遺跡が2・9、桜東畑遺跡が1・4である。

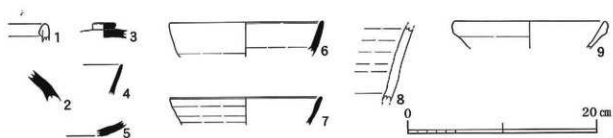
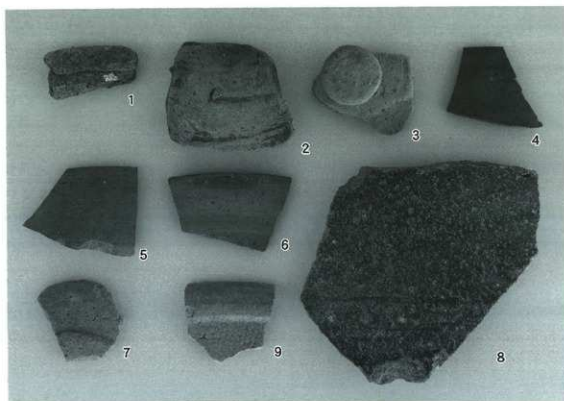


図8 試掘確認調査出土遺物実測図

遺物観察表

番号	種別	器種	グリッド	法量(cm)			調整		備考
				口径	器高	底径	外	内	
1	土師器	製塩土器	83		残1.9		ナデ	ナデ	
2	須恵器	壺	59		残3.2				
3	須恵器	杯蓋	35		残1.5				
4	須恵器	杯	81		残3.2		ロクロナデ	ロクロナデ	
5	須恵器	杯	70	(16.0)	残3.6		ロクロナデ	ロクロナデ	
6	須恵器	椀	90	(16.0)	残2.9		ロクロナデ	ロクロナデ	
7	須恵器	椀	8		残1.5				
8	丹波焼	壺	1-1		残8.0				外面自然釉付着
9	白磁	碗	59	(16.0)	残2.9				内外施釉



第3章 狐塚遺跡

4区に分けて本発掘調査を実施した。

第1節 1区の調査結果

調査は令和元年6月4日(月)～6月20日(木)の実働11日間を費やして行った。調査面積は550㎡である。調査は調査準備、草刈りののち、調査区を設定した。調査対象でない南側水田を排土置き場とし機械掘削を行った。東半を耕土、西半を耕土以外とした。まず耕土を耕土置き場まで距離があることからキャリアーを使用して運搬した。その後、2層目と3層目と4層目の一部を機械掘削した。北から順次人力掘削を行った。6月17日にドローンによって全景撮影を行い、実測・断割り作業ののち、来季は耕作しないことから安全面を考慮して一部埋戻し作業を行い、調査を終了した。

基本層序は第1層耕土、第2層褐細砂、第3層黄褐シルト質細砂、第4層黄褐細砂、第5層にぶい黄褐中砂、第6層が地山である。部分的に第2層と第3層もしくは耕土と第2層の混じった層が第2層の上に存在する。第3層から第5層は河川堆積層である。調査区の南北では堆積状況が変化しており、南側の方が複雑になっている。溝状の落ち込みや浅い凹凸が複数見られる。第3層上面と地山面の2面で遺構検出を行った。

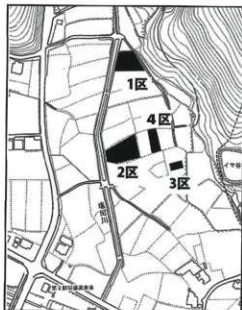


図9 狐塚遺跡調査区位置図

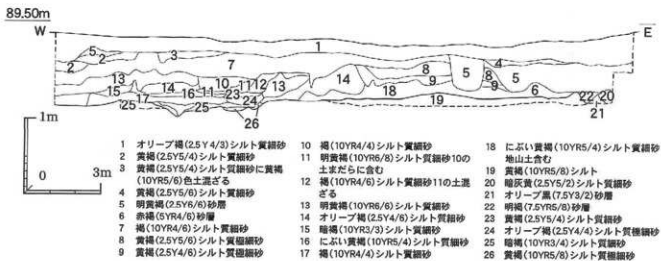
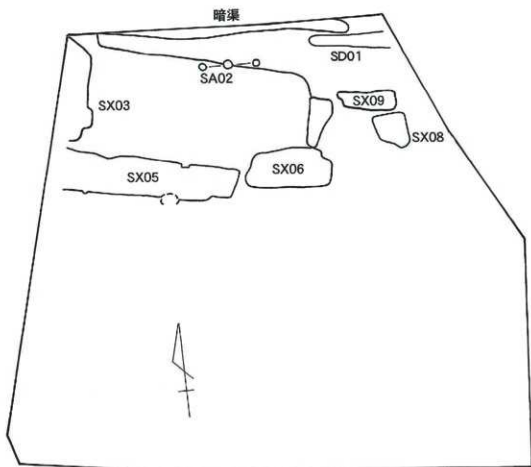
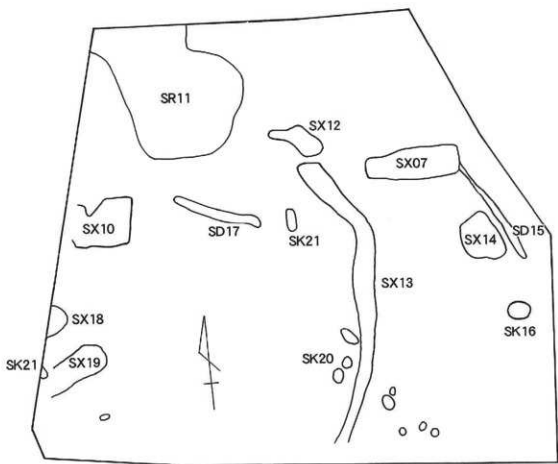


図10 狐塚遺跡1区西壁土層断面図

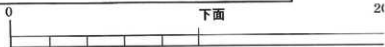


上面



下面

図11 孤塚遺跡1区平面図



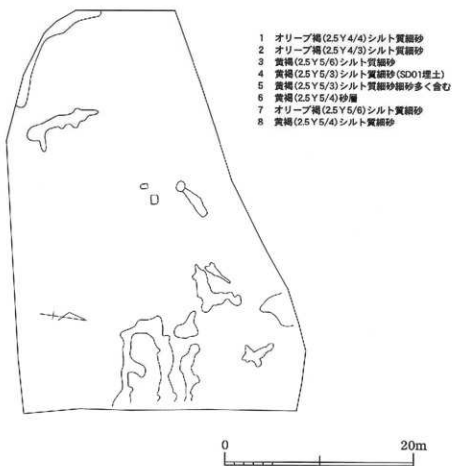
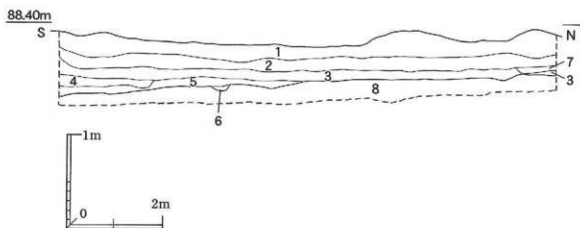


図12 狐塚遺跡2区平面図・土層図

上面の南半は洪水などの影響を受けており、明確な遺構は確認されなかった。北半で検出した遺構は、耕土下で検出した北壁沿いの暗渠と柵・溝・落ち込みである。暗渠は現在の水田と同じ方向で、胴木の上に円礫を並べている。暗渠南側で溝(SD01)を検出している。主軸方向は現在の水田と同じ東西方向で、東側調査区外へ延びている。幅35～45cmで東側が広がっている。深さは最深で20cm、10cm前後を測る浅い溝である。断面形状は半円で堆積上は黄褐細砂の単純堆積である。落ち込みは6基調査した。小形のもの是不定形で、大形は方形に近い。SX05は幅2.2m深さ0.3mを測る。

地山面で検出した下面の遺構はビット・溝・土坑・落ち込み・大畦畔で、性格の明らかな遺構は少ない。攪乱が多いことから遺構の形状も大きく損なわれており、遺構の残存状態は悪いものであった。

第2節 2区の調査結果

遺跡の南西側に位置する調査区で1020㎡を測る。基本層序は、第1層耕土、第2層オリーブ褐シルト質細砂、第3層黄褐シルト質細砂、第4層が遺構面であるにぶい黄褐シルト質細砂である。調査区東側では3層下に洪水堆積層が見られる。また、遺構検出面から下も洪水堆積層が認められる。

検出した遺構は溝・落ち込み・旧河道である。溝(SD01)は調査区南西部に調査区に沿うように弧状を描く溝である。幅1.2m以上で、長さ12.3m、深さ0.12mを測る。水田の区画溝と思われる。

落ち込みは2基調査している。SX02はSD01の東側に位置する南北方向に延びる溝状の落ち込みである。長さ7.8m、幅0.6～1.6m、深さ0.1～0.2mを測る浅い落ち込みである。平面形は直線ではなく凹凸があるが、底面は比較的平坦である。SX03は調査区北東部にあり、調査区北側に延びている。最大幅3.65m、検出長1.8m、深さ0.45mを測る。比較的層はしっかりしており、直に掘り込まれている。

調査区中央から東側にかけては旧河道で遺構面に多くの凹みが見られる。数度にわたる洪水によるものと思われる。明瞭に肩部を検出することが出来た部分を旧河道(SR04)とした。幅1.5～2.5mで断面形状は浅いU字形を呈する。直線的な流れでなく歪が大きく蛇行しており、荒れた状況を示している。地形から北東方向から流れたものと思われ、北東側の微高地に遺跡が存在する可能性が高い。

遺物は古墳時代から中世の須恵器・土師器・陶器が出土している。磨滅を受けた古墳時代後期の甕が出土しており、北東側に古墳後期の遺構か丘陵部に古墳が存在する可能性がある。

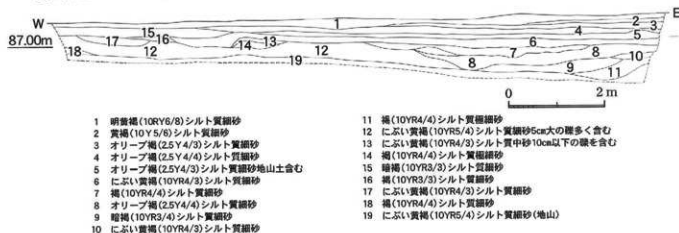


図13 狐塚遺跡3区土層図

第3節 3区の調査結果

狐塚遺跡南東部に位置し、調査面積は104㎡である。水路に相当する部分で東西に長い調査区である。

基本層序は第1層が耕土、第2層がオリーブ褐シルト質細砂、第3層がにぶい黄褐シルト質細砂、第4層にぶい黄褐シルト質極細砂、第5層が地山である。間に洪水堆積である砂礫層やシルト質細砂層が堆積している。

全体的に旧河道に当たると思われる。壁面では2条以上の溝状の落ち込みが確認されている。調査検出面では西側が河道となっているが、それ以前は東側の方が深くなっており、流路を変えていたことが看取される。河道の最も深いところで1.37mを測る。

遺物は第2層と第4層にやや多く含まれ、第4層(地山直上)からは古代の須恵器・土師器が出土している。製塩土器が入っていることが特筆される。第2層からは中世の須恵器・土師器が出土している。

第4節 4区の調査結果

遺跡南側中央に位置する。2区の東側で水路部分に相当する。232㎡の南北に長い調査区である。

基本層序は第1層が耕土、第2層がオリーブ褐シルト質細砂、第3層が黄褐シルト質細砂、第4層黄褐シルト質極細砂(マンガン含む)、第5層が遺構検出面で黄褐シルト質極細砂である。第2層は南半しか存在しない。断割りによって下層は洪水堆積物で遺構面は確認されず、地山も確認していない。

調査区の大半は安定した面は確認されず、流路であろう落ち込み・溝が検出された。洪水時の自然に生じた肩部と思われる。礫はほとんど見られないので下流へ一気に流れたようである。流路は不定形で方向は基本的に東西方向であるが、検出した3条の流路には主軸にばらつきがある。特に南半は複数回の流れが見られ、両肩も明らかでない。落ち込みなどもあるが、これらも自然流路に関係する凹みと思われる。深い落ち込みは0.45mを測る。杭も打ち込まれているが列にはならなかった。旧河道の肩部で液状化現象を数条検出した。いつの地震かは不明である。

北側一部だけ安定した遺構面が残っており、10基のピットを確認した。1列に並ぶもので堀立柱建物の可能性も考えられるが、一応柵としておく。調査区西側に延びている。東側延長上は排水施設を設けたため明らかでなく、南北に曲がる柱穴は未確認である。少なくとも南側には広がっていない。柱間の距離は心々間で西から1.84m、2.78mである。径は0.4～0.5mで、深さは0.35～0.5mを測る。それ以外のピットも柱痕跡が認められ、短期間でも集落が営まれていたものと思われる。

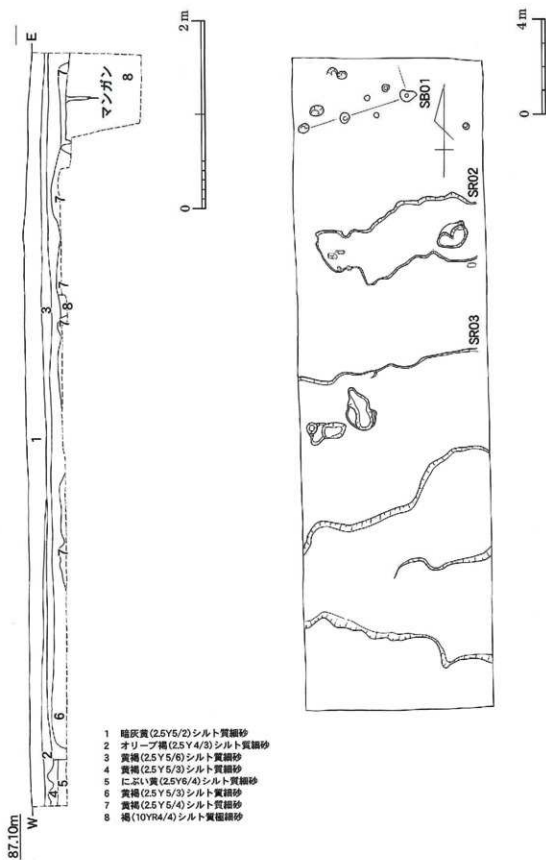


図14 狐塚遺跡4区平面図・土層図

第5節 出土遺物

40点図化している。1・2は小片で磨滅しており明確でないが縄文土器と思われる。1は器表に鉄分が付着しているが、押型文のように見える。2は沈線が2条以上確認され、中期～後期ではないかと思われる。縄文が施文されているかもしれない。

3・4は古墳時代で、3は土師器甕口縁部で口縁端部を肥厚させている。被熱しており、内面は煤が付着している。4は須恵器臙体部である。磨滅しており、断面の角が取れている。円孔が認められ、内面はロクロナデである。

5～13、15～18は奈良時代の須恵器である。5～7は杯蓋で5にはボタン状のつまみが付いている。端部を欠いており、天井部は厚く稜線を持って端部に延びている。6・7は端部で、6は屈曲して端部丸くなっている。7は端部を折り曲げている。8～15は杯である。口縁部は外傾するものと内湾するもの、外反するものがある。17は大形の底部で、一応杯としておく。平底で体部との変化点は甘く、外傾する体部に続く。18は壺底部である。外傾する高台部を有し、端部は内外に肥厚する。底部内面には自然軸が付いている。ロクロナデで高台部との接合部は強いロクロナデになっている。

19～29は中世の須恵器碗である。外傾する口縁部で端部は尖るものと丸く納めるものがある。底部は糸切りである。25・30・31は須恵器捏ね鉢である。25は底部、30・31は口縁部である。端部肥厚し、31は端部を上方につまみ上げている。

32～36は製塩土器である。手捏ねで厚手の土師器である。指圧痕が明瞭に残り、長石・チャート・酸化粒の砂粒を多く含む。32は外傾し、36は直立ぎみに延びるが、他は内湾する口縁部である。端部は丸く納める33～35と角張り気味の32、尖り気味の36と変化がある。

37は土師器皿である。38～40は磁器である。40は青磁碗で底面を除いて施釉している。底面も釉薬が垂れている。14は唐津焼碗口縁部である。外反し外面に甘い稜線を有し、端部は反っている。内面と外面上半に釉薬をかけている。

第6節 小結

今回の調査では、狐塚遺跡を4区に分けて調査した。1区から4区まで安定した面が少なく旧河道が調査区の大半を占めていた。4区で小規模な集落を検出し、小さな微高地上に平安時代から鎌倉時代にかけて居住していたことが明らかとなった。ただ、出土遺物の中に製塩土器が多く含まれることは特筆される。奈良時代の遺物は磨滅していないことから集落が近くにあったことが看取される。今年度調査した桜東畑遺跡との関連がうかがわれる。磨滅しているが縄文土器と古墳後期の須恵器の出土も遡る遺跡があったことを示しており、重要である。

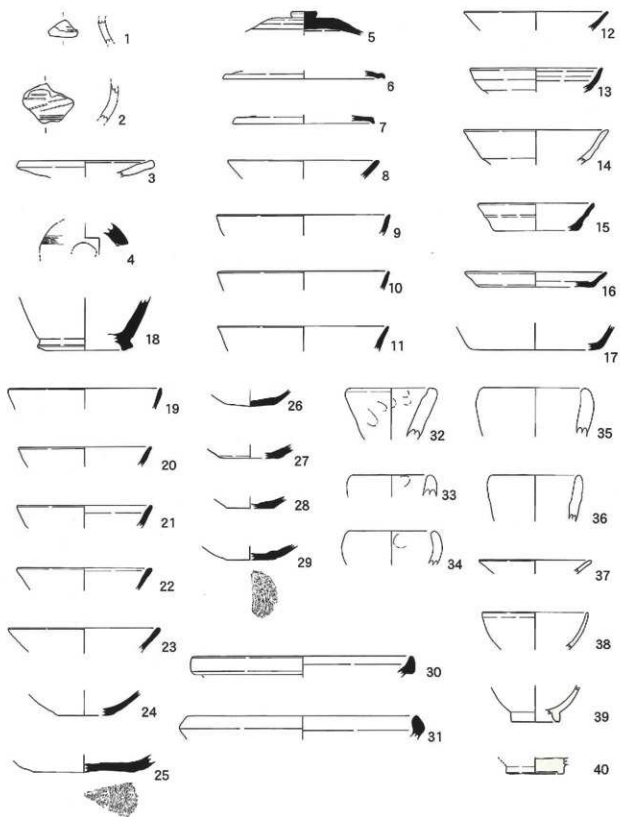


图15 孤塚遺跡出土遺物実測図



土器観察表

番号	種別	器種	遺構	流量 (cm)			調整		備考
				口径	器高	底径	外	内	
1	縄文土器	鉢	4区		残1.8				
2	縄文土器	鉢	4区		残4.3				沈鉢
3	土師器	甕	1区	(14.4)	残1.7		ヨコナデ	ヨコナデ	
4	須恵器	皿	2区		残2.5			ロクロナデ	
5	須恵器	杯蓋	4区		残2.5		ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	
6	須恵器	杯蓋	2区	(17.0)	残0.8		ロクロナデ	ロクロナデ	
7	須恵器	杯蓋	2区	(15.0)	残0.8		ロクロナデ	ロクロナデ	
8	須恵器	杯	4区	(20.0)	残2.0		ロクロナデ	ロクロナデ	
9	須恵器	杯	4区	(18.4)	残2.2		ロクロナデ	ロクロナデ	
10	須恵器	杯	2区SX02	(18.0)	残2.0		ロクロナデ	ロクロナデ	
11	須恵器	杯	2区	(18.0)	残2.6		ロクロナデ	ロクロナデ	
12	須恵器	杯	4区SD01	(15.2)	残2.1		ロクロナデ	ロクロナデ	
13	須恵器	杯	2区	(14.0)	残2.6		ロクロナデ	ロクロナデ	
14	陶器	碗	4区	(15.2)	残3.6		ロクロナデ	ロクロナデ	唐津焼
15	須恵器	杯	4区	(12.4)	2.9	(9.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	
16	須恵器	皿	4区	(15.0)	1.6	(12.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	
17	須恵器	杯	2区		残2.6	(13.9)	ロクロナデ・ナデ	ロクロナデ	
18	須恵器	壺	2区		残5.6	(10.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	貼り付け高台・内面自然熱
19	須恵器	椀	2区	(16.0)	残2.2		ロクロナデ	ロクロナデ	
20	須恵器	椀	3区	(14.0)	残2.1		ロクロナデ	ロクロナデ	
21	須恵器	椀	4区	(14.2)	残2.4		ロクロナデ	ロクロナデ	
22	須恵器	椀	1区	(14.2)	残2.3		ロクロナデ	ロクロナデ	
23	須恵器	椀	4区	(16.0)	残2.6		ロクロナデ	ロクロナデ	
24	須恵器	椀	2区		残2.6	(6.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	底面未調整
25	須恵器	櫻鉢	1区		残1.9	(10.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	底面糸切り
26	須恵器	椀	2区		残1.8	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	底面ヘラ切り未調整
27	須恵器	椀	4区		残1.4	(6.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	底面糸切り後ヘラ
28	須恵器	椀	2区		残1.3	(5.4)	ロクロナデ・ナデ	ロクロナデ	底面未調整
29	須恵器	椀	2区		残1.6	(5.4)	ロクロナデ・ナデ	ロクロナデ	底面糸切り
30	須恵器	櫻鉢	4区	(23.0)	残2.2		ロクロナデ	ロクロナデ	
31	須恵器	櫻鉢	2区	(24.0)	残1.4		ロクロナデ	ロクロナデ	
32	土師器	製塩土器	2区SX02	(8.0)	残5.4		ユビオサエ	ユビオサエ	
33	土師器	製塩土器	4区	(9.0)	残2.3			ユビオサエ	外面磨減
34	土師器	製塩土器	4区	(10.0)	残2.5			ユビオサエ	
35	土師器	製塩土器	3区	(12.0)	残5.0				被熱
36	土師器	製塩土器	4区	(10.0)	残4.8				外面磨減
37	土師器	皿	2区	(12.0)	残1.7		ヨコナデ	ヨコナデ	
38	白磁	碗	1区	(11.0)	残3.9				
39	白磁	碗	4区		残3.8	(5.2)			
40	青磁	碗	2区		残1.2	6.2			

第4章 加治谷藪下五反畑遺跡

第1節 調査に至る経緯と経過

県営ほ場整備事業が県下全域で広く推進施工され、東田原の加治谷地区でもほ場整備事業計画が進められていた。それに先立って分布調査が平成3年度に福岡町教育委員会によって実施された。その結果、広範囲で遺物が採集され遺跡の存在の可能性が高くなった。加治谷地区のほ場整備は主に東側の谷奥から施工される計画であったので、それに即して確認調査も実施した。平成8年度に当該地域周辺の確認調査を実施した。その結果、加治谷藪下五反畑遺跡の立地する段丘に設定した確認調査グリッドでは全体に遺構が検出された。台地状の高い地形であることから、本体工事で削平される計画になっていた。そのことから事前に全面調査を行うこととなった。

調査の都合から3地区に分けた。北東の2枚の田をA区、中央の田をB区、西側の田をC区と呼称して調査を行った。ほとんどの地点では耕作土直下で遺構が確認された。そのことから、耕作土と一部の盛土のみ重機掘削を行い、その下については人力により掘削を行った。断面とともに精査し遺構検出を行い、写真撮影・図化は随時行った。最終的に航空写真撮影を委託して行った。調査は平成9年5月から8月まで行い、調査面積は約2600㎡である。

調査終了間近には現地説明会を開催した。また、整理作業が進んだ平成10年11月には福岡町立神崎郡歴史民俗資料館で「福岡の埋もれた歴史Ⅰ～田原地区～」と題して特別展を行った。



1	加治谷藪下五反畑遺跡	2	大門岡ノ下遺跡	3	北野散布地	4	北広岡遺跡
5	東広畑古墳	6	東新田古墳	7	北野寺山西遺跡	8	北野寺西遺跡
9	妙徳山遺跡	17	加治谷越前遺跡	18	加治谷前田遺跡	19	ビワクビ1号墳
20	ビワクビ2号墳	34	妙徳山古墳				

図16 加治谷藪下五反畑遺跡の位置と周辺の遺跡

平成9年度調査体制

調査主体 福岡町教育委員会 教育長 吉識正明
 社会教育課長 北山正和 社会教育課係長 松岡英二
 社会教育課主事 出田直
 調査参加者 五十川満・谷川晴彦・三船裕崇・三船耕平

確認調査終了後随時整理作業も実施した。土器洗浄や遺構図の調整などの作業は平成8年度～平成15年度に、遺物の接合復元実測などの作業は平成22年度～平成26年度に行ったが、それ以降の作業と報告書刊行は令和2年度に実施した。経費は令和2年度発掘調査と合わせて兵庫県中播磨県民センターと委託契約を交わして実施した。

令和2年度調査体制

調査主体	福岡町教育委員会	教 育 長	高橋 渉
社会教育課長	松田清彦	社会教育課副課長	森 公宏
社会教育課文化財係長	藤原 元	社会教育課主査	長谷川幸子
社会教育課主査	樋口 碧	埋蔵文化財専門員	渡辺 昇
整理作業員	梶 智美	整理作業員	福永明子
整理作業員	原井川奈美	整理作業員	常陰ひとみ

第2節 遺跡の位置と周辺の遺跡

北に天台宗の古刹妙徳山神積寺が鎮座する南側に加治谷藪下五反畑遺跡は存在する。北側には市川町との境界となる山塊が東西に延び、そこから派生する南側斜面や丘陵端部に神積寺は造営され、丘陵端部に妙徳山古墳は築かれている。南側には加治谷を東から西に流れる雲津川があり市川へ注いでいる。丘陵端部と雲津川に挟まれた段丘に遺跡は営まれている。雲津川の南側は氾濫原になっている。

今回の場場整備事業で加治谷から多くの遺跡が確認されている。加治谷藪下五反畑遺跡の北東には加治谷前田遺跡が、その奥には谷北側に加治谷越前遺跡、南側には加治谷大垣内遺跡が、谷最奥部には加治谷垣ノ内遺跡が存在する。縄文時代から中世の遺跡が複合で築かれている。縄文時代の土坑や弥生中期の竪穴住居、奈良時代の竊跡の可能性のあるもの、中世の掘立柱建物などが調査されている。南西方向には大門岡ノ下遺跡があり、縄文晩期の竪穴住居が確認されており、石棒・磨石・石皿が出土している。弥生中期初頭の土坑や中世墓も調査されている。東側には岩尾神社があり、石橋と石鳥居は県指定文化財である。その南側山塊には後期の横穴式石室を主体部とするピクピク古墳群が立地する。丘陵南側の水田部にある大門遺跡ではナイフ形石器と中世末の六道銭を保有する木棺墓が確認されている。北側丘陵は神積寺で石製五重層塔や宝塔・板碑などの石造物が見られる。端部には神崎郡最大規模の横穴式石室を有する妙徳山古墳があり、その谷奥部には中近世墓が構築されている。尾根付近には箱式石棺が調査されており、時期は確定されないが古墳後期であろうか。妙徳山の西側には東新田古墳・東広畑古墳・北野寺西遺跡・上大明寺遺跡など多くの遺跡が存在する。

第3節 調査結果

基本的には1面で調査を行った。一部下層の状況は断割り調査などで確認した。下層は削平されないことから最小限の調査にとどめた。

A区

縄文時代の落ち込みと弥生時代の溝、旧河道を検出した。縄文時代の落ち込みは調査区東壁沿いの中央で確認した。不定形の溝状の落ち込みである。最大幅2.2m、深さ0.3mで長さ6.5mを調査している。埋土から縄文土器・石器が出土している。時期幅が広いことから自然堆積に近いものと思われる。

弥生時代の溝は調査区中央を東から西へ流れ、B区C区へと続いている。幅1.1～1.8mで深さ0.2mの蛇行する溝である。断面形状はU字形から逆台形に近いものである。弥生時代中期から後期の土器が出土している。蛇行していることから、自然の可能性もあるが、用排水的な性格と思われる。集落域や居住域を分けるような溝とは思われない。

旧河道は調査区南寄りで確認し、東西方向に流れている。やはりC区まで続いている。幅2.4～3.2m、深さ最大0.9mを測る。旧河道として調査したが、それ以外にも下層には複数の旧河道が確認された。雲津川の氾濫状況を示す資料である。

B区

中央の調査区で北側には古墳時代以前の氾濫跡が見られ、調査区南側にも一部旧河道や氾濫跡が見られる。北半はA区から延びる旧河道SR01と弥生時代の溝SD01を調査しており、さらにC区へ延びている。南半で調査した遺構は古墳時代の遺構に限られ、竪穴住居2棟と掘立柱建物1棟・柵1基・土坑1基を検出した。

SH01は突出部を有する方形住居である。南辺4.6m、西辺6.4m、北辺4.8m、東辺6.0mを測る。北東隅に東西2.3m、南北0.65mの突出部が付与されている。壁溝は見られない。残存状態は悪く僅か数cmしか残っていない。上屋構造も不明である。中央に土坑状の浅い落ち込みがある。

SH02は調査区南端に位置している。一部拡張して調査を行った。方形住居で竈を持っている。西辺6.0m、北辺5.0mで東辺は直線ではなく弧を描いている。南東コーナーより1.5mほど北側に壁に沿って竈を設けている。1辺1mの方形で、焚き口部は広がっている。焚き口の延長部に1.4m離れて焼土塊が見られた。最大長0.8mの不定円形を呈する。幅0.2～0.3mの壁溝を有している。断面逆台形で0.15mと浅い。柱穴は4基あり4本柱である。コーナーに近い床面外寄りに掘られている。柱間は東西2.7m、南北3.6mである。主軸方向はSH01と同じN30°Wである。

掘立柱建物SB01は調査区中央に位置している。東西2間の4.2m、南北3間の5.1mの総柱建物である。柱間は心々間で西辺が北から1.7m・1.9m・1.5m、南辺で西から2.2m・2.0mを測る。柱穴の径は最大0.65m、深さ0.55mである。

柵SA01はSB01の南側に位置している。主軸方向もSB01と同じことから有機的な遺構と思われる。SB01南辺から2.4m離れている。東西3間9.5mで、心々間は西から2.8・3.6・3.2mを測る。

土坑SK01は調査区中央東寄りで検出した。SB01の東側にあり、平面はいちじく形を呈し、東側が細くすばまっている。長さ5.2m、最大幅2.2mを測る。土坑上部には礫が詰められていた。

C区

北側にはA区B区から延びているSR01とSD01が存在し、さらに西側に続いている。B区と違って埋没後遺構が構築されている。竪穴住居と掘立柱建物である。竪穴住居SH03は調査区北西に位置しており、西側に延びている方形住居である。南北4.2mで東西の検出長は3.2mである。幅0.6～0.8mの高床部を周囲に有する焼失住居である。低床部と高床部との比高差は0.15mである。

掘立柱建物は2棟調査している。SB06は調査区北西にあり、西側調査区外へ延びている。柱穴が一部不明瞭であるが、南北3間、東西2間以上の側柱建物である。主軸方位はN22°Wである。SB07は調査区北東部にあり、B区の方へ延びている。南北4間、東西2間を確認しており、それ以上の側柱建物である。B区に続いているとすると、4間×6間以上の大形の建物に復元される。南辺北側にも内側に柱穴があるので、側柱建物とは決められない。底の可能性も考えられる。柱穴の規模などから、SB06・07ともに他の掘立柱建物よりは新しい中世前半の遺構ではないかと思われる。

調査区南半では掘立柱建物4棟と柵1条と溝・ピットを検出している。SB02は中央付近に位置している。2間×2間で、中央にもピットがあるが規模が小さいことから、側柱建物であろう。東西4.2m、南北4.0mである。SB03は南端にあり、SB02と同じく2間×2間の側柱建物である。規模も相似た東西4.0m、南北4.2mである。西辺を描えていることから、同時併存した建物と思われる。SB04はSB03の西側に位置する南北2間、3.6mを測る西側調査区外に延びる建物である。

柱穴がしっかりしていること、他建物と並んでいるよう思えるので掘立柱建物とした。SB05はSB02と切り合い関係にある。南北3間、東西1間の建物である。東西に延びていたかもしれない。南北5.1mを測る。主軸方位はすべて同じでN18°Wである。

櫓(SA01)は調査区南西にあり、主軸方向は掘立柱建物より少し西へ振るN22°Wである。南北に6間あり、12.8mを測る。主軸方向からSB07と同じ新しい時期かと思われる。調査区南側に2本の溝が弧状に巡っている。幅0.4~0.6mで調査区内を東西に貫いている。また、この2本の溝を切るように1段階新しい南北方向の溝が3本認められた。ともに排水施設かと思われる。ピットは多数検出されており、現在確認した以上に建物や櫓があったと思われる。

第4節 出土遺物

出土遺物は幅広い時代のもが見られる。縄文時代から近世までの土器・石器が出土している。

1~20は縄文土器である。すべて小片で磨滅している。1は表裏両面に施文されている。細かい縄文で斜位に施されている。砂粒を多く含み、内外面とも暗茶褐色を呈する。前期まで遡るものと思われる。2も1に近い破片かと思われるが、明確でない。外面は明るい褐色をしている。3~14は中期後半頃の沈線有する磨消縄文を主体とする土器である。長石などの砂粒を多く含み、褐色から黄褐色を呈するものが多いが、10・14のように黒っぽい土器もある。16・17は口縁端部に刻み目を有する船元I式であろうか。18は底部で、19は沈線3条を施す後期の深鉢である。元住吉山I式と思われる。20は突帯文を持つ深鉢で晩期後葉の所産である。端部に突帯を有し刻み目を施している。緩やかに開くが最大腹径は口径とあまり変わらない。

石器は写真(図版52)だけで図化していないが20点ある。そのうち14点が石鏃である。S13だけ平基で他は凹基で、しかも小型が多く古相を示しているものと思われる。S14は飛行機鏃と称される古いものである。S11も長さが短く弧を描く変わったタイプである。S15・S16・S18は楔形石器であるが風化が進んでおり、石鏃よりも古い可能性が高い。

21~40は弥生中期後半で、21~27は壺である。21は外傾する口縁部で端部は角張る。ヨコナデで3条の凹線を有する。器台の下台部の可能性もある。22は頸部で3条の凹線の間に刺突文が施されている。チャートや酸化粒を多く含んでいる。23は磨滅著しい頸部で、かろうじて4条の凹線が看取される。24は大きく外反し端部肥厚している。頸部全体に凹線があったようにも見えるが磨滅しており、2条以上である。端面にも凹線が施されているかもしれない。赤色顔料を塗布していた可能性が高い。25は外傾する頸部から短く開く端部で内外に肥厚している。やはり凹線が施されているかもしれない。26は僅かに外反する口縁部で端部肥厚する。頸部は柳描きで古相を示す。器表は赤く仕上げられている。27は内湾する口縁部で端部角張る。外面に4条の凹線が見られる。

28~33は甕である。28は内湾する体部でくの字口縁になるが端部は残存していない。内外面ともハケ整形である。器壁は厚い。29はバチ形の短い口縁部である。端面には凹線が見られシャープな作りである。30は端面に2条の凹線を施す外反する口縁部である。磨滅顯著であるがヨコナデであろう。31は外傾し端部肥厚する。白っぽい精良な胎土で化粧土を塗っている。32はバチ形の短い口縁部から内湾する体部である。外面には成形痕が認められるが、明瞭でない。タタキの可能性もあるが粗いハケとしておく。33は内湾する体部で頸部までの破片である。口縁部を欠くことから明確ではないが、煤が付くことから甕としたが、胎土が良好なことから下部に刺突文が巡る点からは鉢の可能性もある。

34は鉢口縁部である。内湾し端部肥厚ぎみに角張る。黒斑であろうか、外面は黒くなっている。35は台付鉢か無頸壺の脚台部である。内外面ともユビ成形の痕跡が明瞭である。外面は粗いハケ整形している。内面には絞り目が残る、工具の当て痕跡も認められる。円板充填と思われるが剥離痕は確認出来ない。裾端部はヨコナデである。36～39は高杯脚部と思われる。36は外反しており、端面は中央が凹んでいる。37は裾部径大きく薄手である。内面はハケ整形ののちナデで、端部はヨコナデ。38は凹線になっている。ヨコナデ仕上げ。39はやや薄手で内湾ぎみの体部である。端部は肥厚している。器表が剥離して整形痕は看取出来ない。40は器台である。幅の広い凹線を3条施しており下へ広がっている。内面にはハケが見られる。

41・42は弥生後期末の甕である。右上がりの幅広のタタキが施されている。小石粒多く含んでいる。42は磨滅著しく被熱している。短く外反し端部角張る。43も甕口縁部であるが内湾し端部内側に折り曲げている。布留傾向壺とも思えるが、あまり見ないものである。44も内側に折り曲げる端部で内湾する口縁部で、古墳前期であろう。ヨコナデ仕上げであるが歪である。45～49は底部である。45は小さな平底から内湾する。外面はハケ整形で内面はナデである。46は平底から外反気味に開き、磨滅しているがタタキ成形かと思われる。47は底部に粘土を付加した丸底でユビ成形である。48は底径が大きい平底から体部に続く。厚みがあることから壺かと思われる。49は磨滅しているが甕底部である。平底から外反する。

50は小片で断定しにくい、器台か高杯の上部と思われる。外反し稜線を持ってさらに開くもので、稜線部分の破片である。下部に円形の刺突文が並んでいる。51は器台上部口縁である。薄く仕上げられており内湾ぎみに開いている。52は壺で、低い卵形の体部から外反する口縁部で端部尖る。内面は粘土紐の織ぎ目が明瞭に残っている。外面は黒色の有機質が付いている。内面に見られないので、塗布したものと思われる。53は高杯の筒部で磨滅している。残存部端に粘土の織ぎ目痕があるので、ここから杯部になろうかと思われ、円板充填であろう。54は土製品である。円形で端部が反り、中央がつまみ状になっている。鏡形のように見えるが、不明である。

55～60は古墳後期の須恵器で、55～57は甕体部の破片である。外面タタキ、内面当て具痕（青海波文）が残る。58・59は高杯口縁部である。ロクロナデで59は下部にヘラ工具痕が見られる。60は杯身で平底ぎみから内湾する。端部は丸く納める。

61～72は古代の土器で、61～63は須恵器、他は土師器である。皿など新しくなるかもしれない。61は杯bで内湾する体部で、やや外傾する方形の高台が付く。62・63は甕口縁部でロクロナデ、62は外反し端部肥厚する。63は短く外反し端部内外に肥厚する。内面にハケメ、外面に工具痕が残る。64は杯で底部未調整である。内湾し端部丸い。65は皿で色調が赤っぽく砂粒を含む。66は径からは杯と思われるが内湾し屈曲して端部外傾する。ヨコナデが強い。67は端部外面に沈線状の凹みを持ち端部薄く尖る。径は小さめだが杯と思われる。68は皿で器高0.9cmと低く内湾する。69は平底の椀であろうか。外傾する。70～72は托である。70は平底で中央に孔をあけている内面に粘土が盛り上がっている。ユビ成形が残る。体部は外反している。71は平底で穿孔があるか不明である。糸切り底である。72は復元できたもので、平底で中央に穿孔が見られる。内湾ぎみに端部に続いており丸く納める。底部はヘラ切りか工具痕が残る。3点ともロクロナデで仕上げられており、磨滅している。

73～85は中世の遺物で、73～80は須恵器椀である。73～76は内湾する口縁部で重ね焼きの痕跡が認められる。77～80は底部であるが変化がある。77は平底が突出しており、強めのロク

ロナデである。78・79は低い底部で底面と体部との稜線が甘く、糸切りである。80は平高台で糸切りである。81～83は土師器甕である。81は短い口縁部で外傾し端部を外側につまみ出す。82は外反し端部角張る。この2点は色調胎土などからあまり新しくはないと思われる。83は外反し端部角張るが端面中央が凹んでいる。体部は外傾し、内面はユビ整形である。外面には粗いタタキが施されている。播但型の古いタイプと思われる。84は青磁碗で劃花文が見られる。12世紀末から13世紀前半であろう。85は白磁碗で内湾し端部は玉縁になる。残存部はすべて釉がかかっている。86は備前焼甕底部である。87は瓦質土器体部である。内面はハケ整形である。羽釜であろうか。

第5節 まとめ

今回の調査で加治谷地区のほ場整備事業の調査は終了し、多くの成果を上げることが出来た。雲津川の歴史が明らかになった。岩尾神社の所在する部分に岩盤が露出しており、流路が規定されることになる。今回の調査区では、そこから流れた氾濫状況が明確となった。調査区北半はほぼ氾濫原である。

氾濫原は古い時期から認められる。遺物が出土したのは早期末か前期と思われる時期からである。磨滅しているが、この時期には周辺部で生活をしていただものと思われる。さらに中期末から後期にかけて旧河道とA区北西隅の落ち込みから土器が出土している。さらに晩期にかけての土器を確認している。南西部に位置する大門岡ノ下で晩期の竪穴住居が調査されており、周辺部での居住が明らかになっている。

弥生時代になると旧河道とSD01から中期後半から後期の土器が出土している。溝以外には遺構は検出していないが、周辺の遺跡ではこの時期の遺構が確認されている。

今回の調査で検出した遺構は、ほとんど古墳時代後期の遺構である。竪穴住居3棟、掘立柱建物5棟、槽1条、溝2本などである。掘立柱建物の主軸方位はほぼ同じで一部切り合い関係があるものの、近い時期の遺構と思われる。竪穴住居は3棟調査した。SH02には竈が築かれている。竪穴住居と掘立柱建物の時期差は小さく、興味深い資料である。南側にも溝が確認されており、南北方向は遺跡範囲を確定したものと生まれ、僅かに西側に広がる可能性はあるが、ほぼ集落を調査したものと生まれ。

掘立柱建物2棟SB06・SB07は平安時代末から鎌倉時代の遺構と思われる。柱穴から遺物は出土していないものの、包含層からは中世の遺物が出土しており、洪水堆積物の上に遺構が掘られていることと、規模などから中世と考えられる。これは北側に創建された神積寺との関連が考えられる。神積寺の寺域内と思われる。それ以降は溝があるかもしれないが、氾濫原か水田である。

加治谷藪下五反畑遺跡の原稿は、出田直氏が担当執筆した当時の実績報告・現地説明会資料・調査記録を基に渡辺が執筆した。

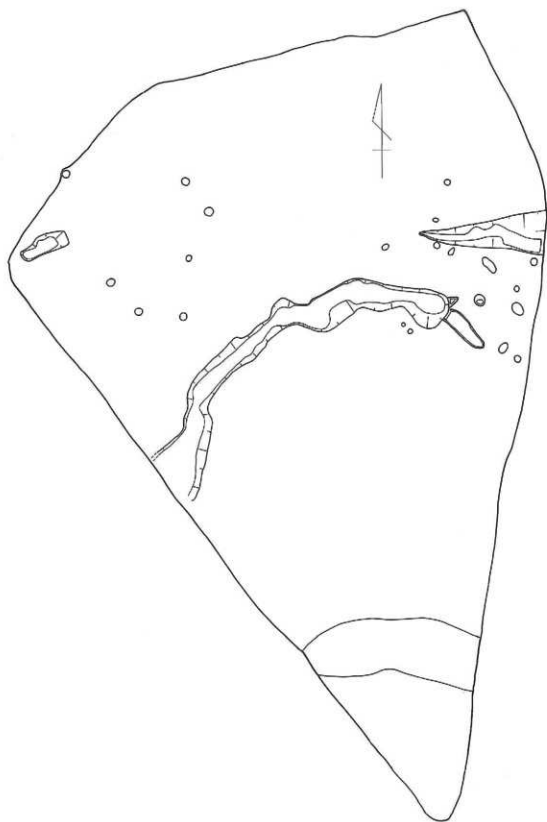


图17 A区 平面图





图18 B区 平面图



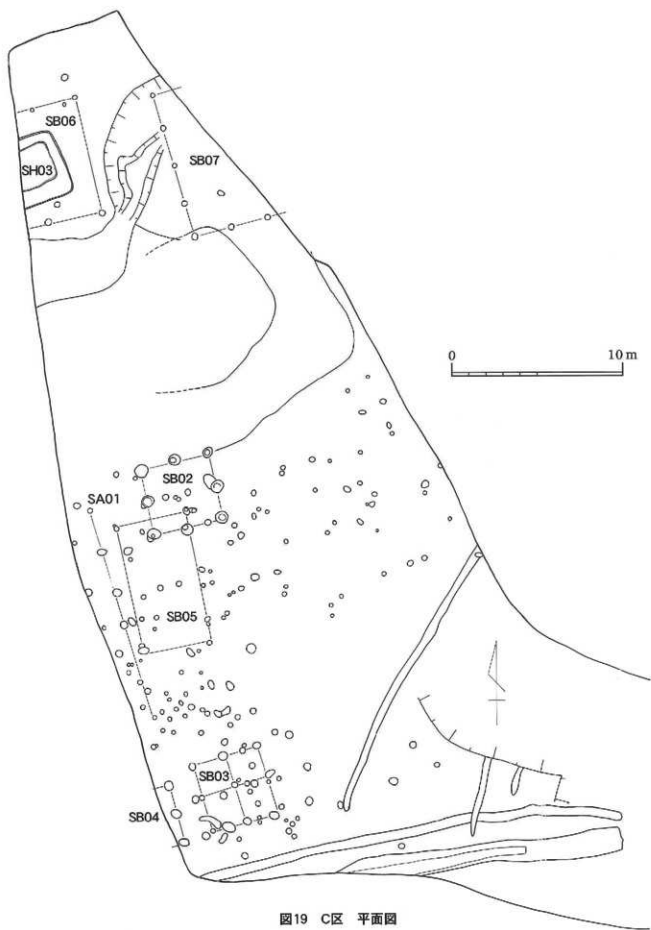


图19 C区 平面图

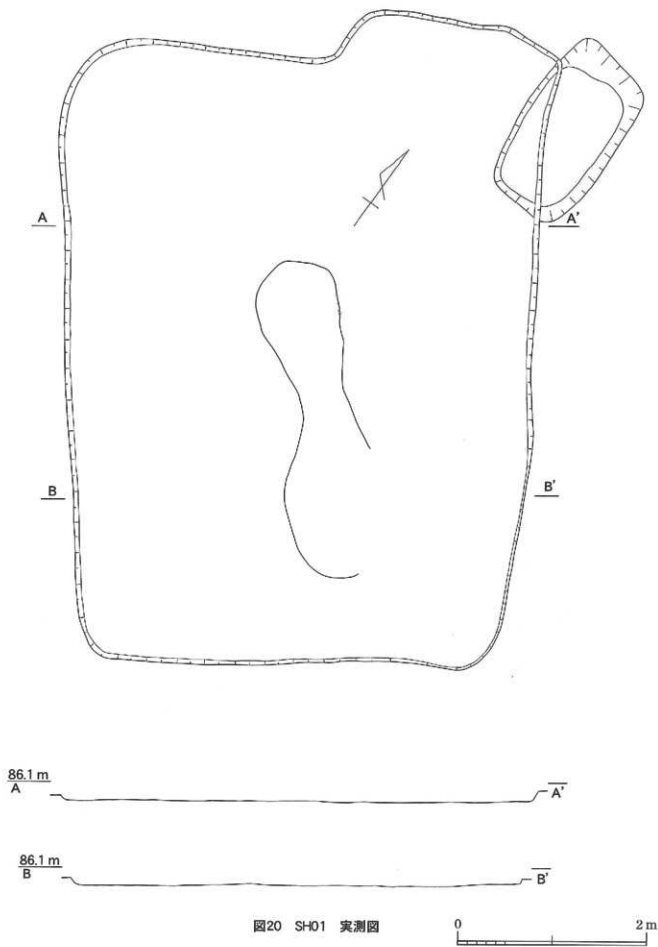


图20 SH01 实测图

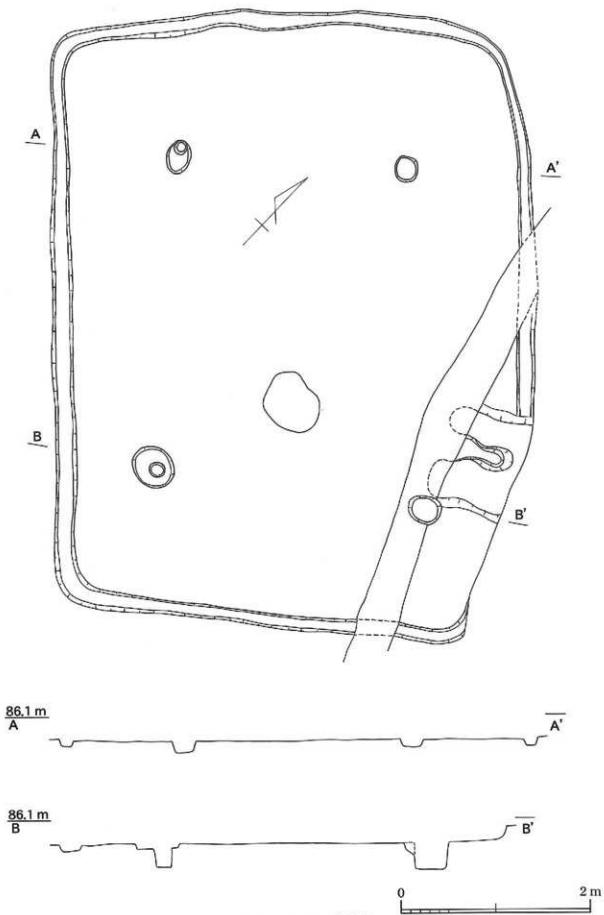


图21 SH02 实测图

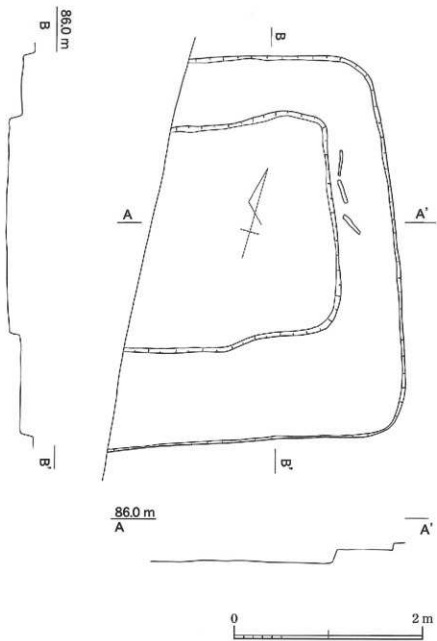


图22 SH03 实测图

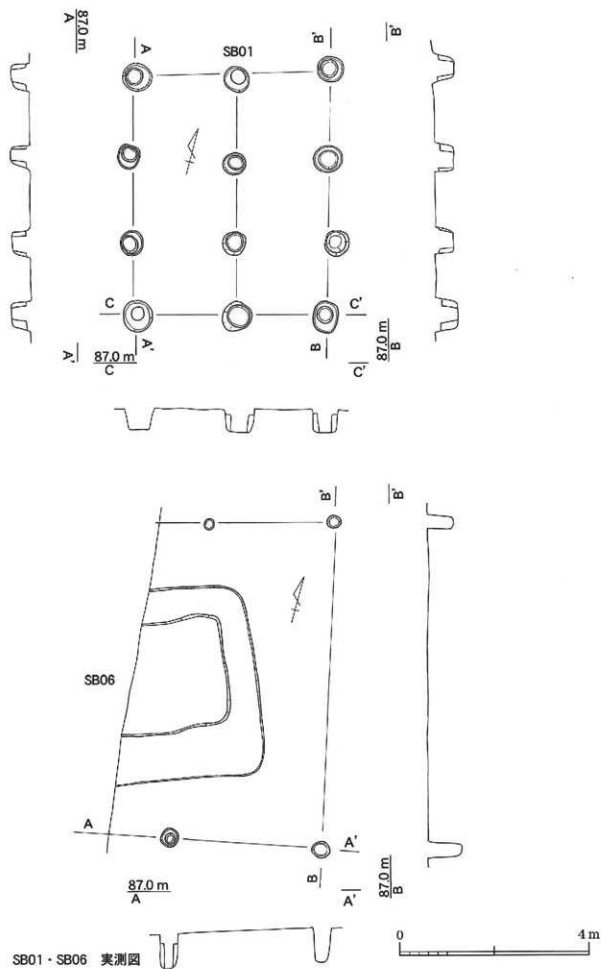


图23 SB01·SB06 实测图

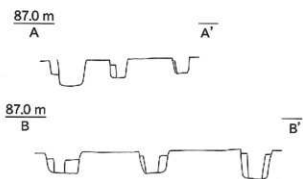
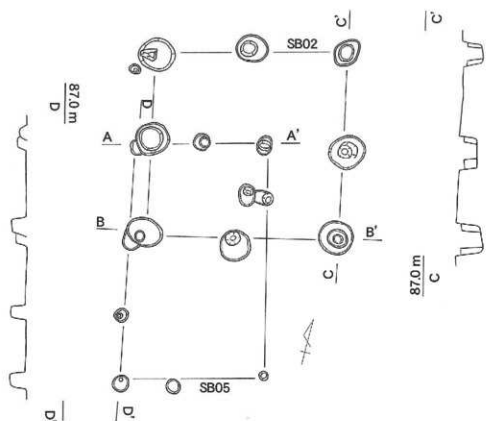


图24 SB01 · SB05 实测图

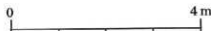
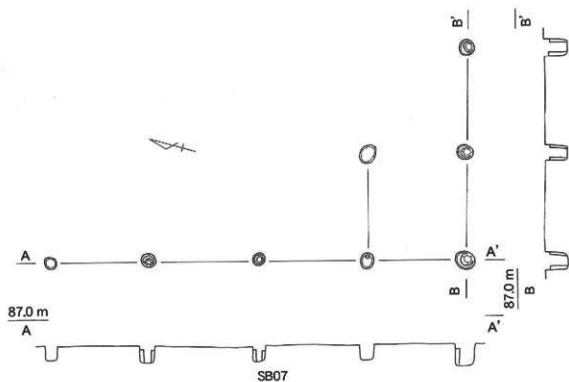
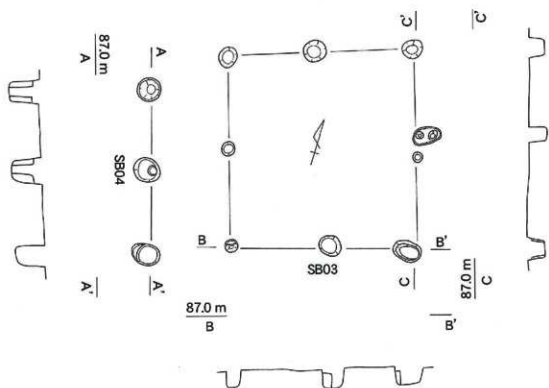


图25 SB03 · SB04 · SB07 实测图

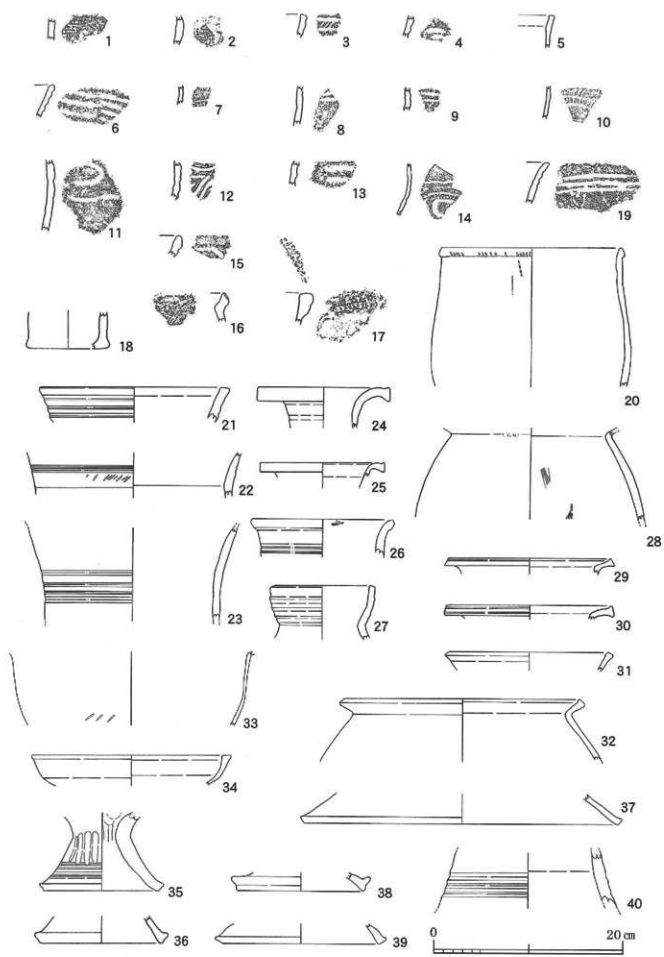


图26 遗物实测图(1)

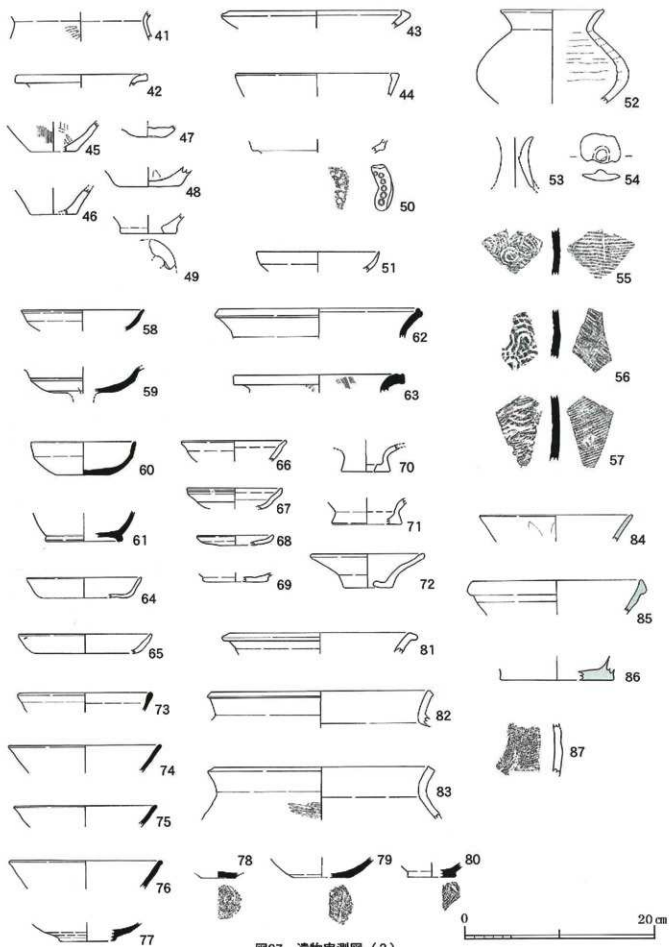


图27 遗物实测图(2)

土器観察表

番号	種別	器種	遺積	法量 (cm)		調整		備考	
				口径	器高	底径	外		内
1	縄文土器	鉢			残2.1				
2	縄文土器	鉢			残3.0			外面被熱	
3	縄文土器	鉢			残2.5				
4	縄文土器	鉢			残2.3				
5	縄文土器	鉢	D区309		残3.4				
6	縄文土器	鉢			残3.7				
7	縄文土器	鉢	D区		残2.0				
8	縄文土器	鉢			残4.3				
9	縄文土器	鉢			残2.5			煤付着	
10	縄文土器	鉢			残3.5				
11	縄文土器	鉢			残7.6				
12	縄文土器	鉢			残4.1				
13	縄文土器	鉢			残2.6				
14	縄文土器	鉢	D区		残5.6				
15	縄文土器	鉢			残2.3				
16	縄文土器	鉢			残3.0			外面別目・沈線、内面溝目	
17	縄文土器	鉢			残3.3				
18	縄文土器	鉢			残3.8	(8.0)			
19	縄文土器	鉢			残4.7				
20	縄文土器	鉢	C区55	(19.0)	残14.7			外面刮み目あり	
21	弥生土器	壺		(19.5)	残3.7		ヨコナデ	外面凹線・内外面煤付着	
22	弥生土器	壺			残4.8	ヘラ指		外面凹線刺突文あり	
23	弥生土器	壺			残9.9		ヨコナデ	外面凹線あり	
24	弥生土器	壺		(13.8)	残4.3	強いナデ		外面煤付着	
25	弥生土器	壺		(13.0)	残2.7	ヨコナデ	ヨコナデ	内面被熱	
26	弥生土器	壺		(14.8)	残4.0		ハケメ	擦指きあり	
27	弥生土器	壺	C区	(10.0)	残5.7	強いヨコナデ		外面凹線あり	
28	弥生土器	甕			残9.5	ハケメ・ナデ	ハケメ	撥入土器・角閃石	
29	弥生土器	壺		(17.2)	残1.7	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部凹線あり	
30	弥生土器	壺		(17.4)	残1.5	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部凹線あり	
31	弥生土器	壺	D区	(17.8)	残1.9	ヨコナデ	ヨコナデ		
32	弥生土器	壺	C区	(24.8)	残6.7	ハケメ(タタキ)			
33	弥生土器	甕か鉢			残7.8	ヨコナデ	ヨコナデ	外面刺突文あり	
34	弥生土器	鉢		(21.0)	残3.2	ヨコナデ	ヨコナデ	外面被熱	
35	弥生土器	鉢か壺			残8.3	(12.0)	ユビナデ・ヨコナデ・破り目	内面煤付着	
36	弥生土器	高杯			残2.8	ヨコナデ	ヨコナデ		
37	弥生土器	高杯		(34.0)	残3.2	ヨコナデ	ヨコナデ		
38	弥生土器	高杯			残1.9	(13.0)	強いナデ	被熱	
39	弥生土器	高杯			残2.1	(16.4)	ヨコナデ	ヨコナデ	外面被熱
40	弥生土器	器台			残5.9		ハケメ	外面凹線あり	
41	弥生土器	壺			残3.0	タタキ			
42	弥生土器	甕	D区サブ9	(14.0)	残1.3	ヨコナデ	ヨコナデ		
43	土師器	甕	D区284	(18.2)	残1.8	ヨコナデ	ヨコナデ		

番号	種別	器種	造構	法量(cm)			調整		備考
				口径	器高	底径	外	内	
44	土師器	壺		(17.0)	残2.4		ヨコナデ	ヨコナデ	被熱
45	土師器	壺			残2.2	(5.0)	ハケメ・ナデ	ヘラナデ・タタキ	外面被熱
46	土師器	壺			残2.8	(4.8)		タタキ・ユビナデ	
47	土師器	壺			残1.2	3.5	未調整	ユビナデ	外面底部黒斑あり
48	土師器	壺			残2.1	(6.8)		ユビナデ	外面被熱痕あり
49	土師器	瓶			残2.1	(5.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	
50	土師器	高杯か器台	D区291		残1.4		ナデ	ヨコナデ	外面割突文あり
51	土師器	器台	C区75	(13.0)	残2.1		ヨコナデ	ヨコナデ	搬入土器(山陰)
52	土師器	壺	B区	(10.8)	残9.9				外面被熱痕・煤付 内面割土粒痕あり
53	土師器	高杯			残5.4				内面被熱痕あり
54	土製品	鏡形?			残1.2		ナデ	ナデ	幅4.1×2.9
55	須恵器	壺			残5.0		平行タタキ	同心円文タタキ	
56	須恵器	壺			残5.2		タタキの後ハケメ	同心円文タタキ	
57	須恵器	壺			残7.1		タタキ	同心円文タタキ	
58	須恵器	高杯	D区143		残2.2		ロクロナデ	ロクロナデ	外面自然輪付着
59	須恵器	高杯	南端		残2.8		ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	外面にヘラ指あり
60	須恵器	杯		(12.0)	3.5	5.6	ロクロナデ	ロクロナデ	
61	須恵器	杯			残3.2	(8.0)	ロクロナデ		
62	須恵器	壺		(22.0)	残3.1		ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	
63	須恵器	壺		(17.7)	残1.9		タタキの後ロクロナデ	ロクロナデ・ハケメ	
64	土師器	杯		(12.0)	残2.1	(9.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	
65	土師器	皿		(14.0)	2.0	(11.4)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	
66	土師器	杯		(11.0)	残2.2		ヨコナデ	ヨコナデ	
67	土師器	杯		(10.0)	残2.2		ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	
68	土師器	皿		(8.0)	1.0	(6.4)	ヨコナデ	ヨコナデ	
69	土師器	椀			残1.0	(6.9)	ヨコナデ		
70	土師器	托			残2.9	5.2	ヨコナデ	ヨコナデ	穿孔あり
71	土師器	托			残2.8	(7.2)			底部糸切り
72	土師器	托		(11.4)	残3.6	5.2	ハケナデ	ハケナデ・ナデ	穿孔あり
73	須恵器	椀		(14.0)	残2.0		ロクロナデ	ロクロナデ	
74	須恵器	椀		(16.0)	残2.9		ロクロナデ	ロクロナデ	
75	須恵器	椀		(15.0)	残2.2		ロクロナデ	ロクロナデ	
76	須恵器	椀		(16.0)	残3.0		ロクロナデ	ロクロナデ	
77	須恵器	椀			残1.9	(6.0)	ロクロナデ・ナデ	ロクロナデ	
78	須恵器	椀			残0.7	3.6	ナデ	ロクロナデ	底部糸切り
79	須恵器	椀			残2.1	(6.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	底部糸切り
80	須恵器	椀			残1.5	(5.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	底部糸切り
81	土師器	壺		(19.0)	残2.2		ヨコナデ	ヨコナデ・タタキ	
82	土師器	壺			残3.9				
83	土師器	壺		(22.7)	残5.6		ヨコナデ・タタキ	ヨコナデ	
84	青磁	碗	D区	(16.0)	残2.8				龍泉窯系・内外面施釉
85	白磁	碗	D区	(17.5)	残3.6				内外面施釉
86	備前焼	壺			残2.6	(12.0)			内外面自然輪付着
87	瓦質土器	羽釜			残5.6		ロクロナデ	ハケメ	

石器計測表

番号	種別	器種	遺構	法量(cm)			重量(g)	石材	備考
				長さ	幅	厚さ			
S1	石器	石鏃		1.2	1.0	0.20	0.189	サヌカイト	
S2	石器	石鏃		2.3	1.4	0.45	1.149	サヌカイト	
S3	石器	石鏃		2.6	1.9	0.30	1.048	サヌカイト	
S4	石器	石鏃		1.9	1.5	0.30	0.587	サヌカイト	
S5	石器	石鏃		2.0	1.4	0.35	0.773	サヌカイト	
S6	石器	石鏃		2.0	1.2	0.20	0.424	サヌカイト	
S7	石器	石鏃		2.2	1.5	0.4	0.936	サヌカイト	
S8	石器	石鏃		2.2	1.9	0.30	8.190	サヌカイト	
S9	石器	石鏃		(2.0)	1.6	0.40	1.061	サヌカイト	
S10	石器	石鏃		1.5	1.1	0.2	0.235	サヌカイト	
S11	石器	石鏃		1.5	1.5	0.2	1.061	サヌカイト	
S12	石器	石鏃		(1.6)	1.4	0.20	0.490	サヌカイト	
S13	石器	石鏃		(2.0)	1.5	0.40	0.779	サヌカイト	
S14	石器	石鏃		2.1	(1.2)	0.15	0.596	サヌカイト	
S15	石器	楔形石器		3.1	1.2	0.50	2.475	サヌカイト	
S16	石器	楔形石器		3.6	1.1	0.60	1.230	サヌカイト	
S17	石器	チップ		1.3	1.2	0.10	0.235	サヌカイト	
S18	石器	楔形石器		1.7	1.7	0.30	0.659	サヌカイト	
S19	石器	削片		2.7	2.0	0.60	3.061	サヌカイト	
S20	石器	不明(石包丁)		6.5	3.2	0.40	15.132	粘板岩	磨製

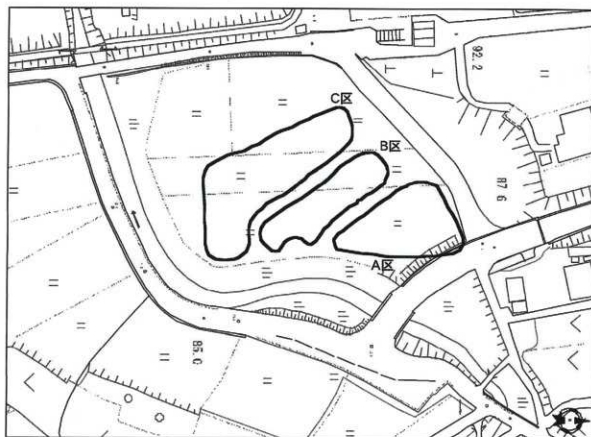


図28 調査区位置図

報告書抄録

ふりがな	まいごうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	埋蔵文化財調査報告書
副書名	狐塚遺跡 加治谷敷下五反畑遺跡
シリーズ名	福岡町埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	21
編著者名	樋口 器・渡辺 昇
編集機関	福岡町教育委員会
所在地	〒679-2280 兵庫県神崎郡福岡町南田原3116-1 TEL.0790-22-0560
発行年月日	2021年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 ㎡	要因
		市町村	遺跡番号					
狐塚遺跡	兵庫県神崎郡福岡町高岡字 狐塚16971番地1他	28443	410071	34度 58分 24秒	134度 44分 22秒	2019年 6月4日～ 2020年 1月24日 (21日)	1,906㎡	ほ場整備
加治谷敷下 五反畑遺跡	兵庫県神崎郡福岡町東田原 字敷下五反畑1912番地	28443	410046	34度 57分 29秒	134度 46分 20秒	1997年 5月～8月	2,600㎡	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
狐塚遺跡	集落跡	平安	欄跡、 土坑、水田跡	須恵器、土師器、 製埴土器、陶器	
加治谷敷下 五反畑遺跡	集落跡	縄文時代～中世	掘立柱建物、 土坑、竪穴住居	縄文土器、 弥生土器、 須恵器	

写真図版

狐塚遺跡



No.1 調査準備



No.1 機械掘削



No.1 人力掘削



No.1 (南から)



No.1-1 機械掘削



No.1-1 (南から)



No.2 (東から)



No.2 断ち割り (東から)

桜区

狐塚遺跡

桜区



No.3 (東から)



No.3 埋戻し



No.4 西壁



No.4 埋戻し後 (南から)



No.5 人力掘削



No.5 (東から)



No.6 (東から)



No.6 北壁

狐塚遺跡

核区



狐塚遺跡全景（南から）



狐塚遺跡全景（北から）



No.7 機械掘削



No.7（東から）



No.8 人力掘削



No.8（東から）



No.8 断ち割り（東から）



No.8 埋戻し

狐塚遺跡



No.9・11 (西から)



No.9 (南から)



No.10 人力掘削



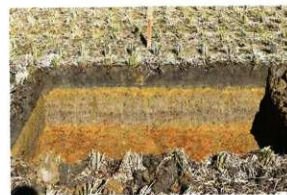
No.10 (南から)



No.10 炭検出状況



No.10 実測風景



No.11 (南から)



狐塚遺跡全景 (南から)

桜遺跡



No.12・78 周辺 (西から)

桜区



No.12 (南から)



No.13 機械掘削



No.13 人力掘削



No.13 (南から)



No.14 (南から)



No.14 断ち割り (南から)



No.14 埋戻し終了 (南から)

桜遺跡

桜区



No.15 (南から)



No.16 (南から)



No.18 (南から)



No.19 (南から)



No.19・20 周辺 (南から)



No.20 (南から)



No.21 人力掘削



No.21 (南から)

桜遺跡



No.22 機械掘削

桜区



No.22 (南から)



NO.23 調査前 (南から)



No.23 (南から)



No.23 埋戻し後 (南から)



No.23 埋戻し



No.24 人力掘削



No.24 (南から)

桜遺跡



No.25～30 周辺 (南から)

桜区



No.25 (南から)



No.26 (南から)



No.26 実測風景



No.27 人力掘削



No.27 (南から)



No.28 (南から)



No.28 埋戻し

桜遺跡



No.29・30 周辺 (東から)

桜区



No.30 (南から)



No.32 機械掘削



No.32 (南から)



No.34 埋戻し



No.34 (南から)



No.35 (南から)



No.36 (南から)

桜遺跡



No.37 (南から)

桜区



No.37 東壁



No.38 (南から)



No.39 (南から)



No.40 (南から)



No.40 断ち割り



No.41 (南から)



No.39～41 周辺 (北から)

桜遺跡



No.43・44 調査区 (南東から)

桜区



No.43 (南から)



No.44 人力掘削



No.44 (南から)



No.46 (南から)



No.46 実測風景



No.47 (南から)



No.48 (南から)

林谷遺跡



No.49・50 周辺 (北西から)

桜区



No.49 人力掘削



No.49 (南から)



No.50 (南から)



No.51 機械掘削



No.51 人力掘削



No.51 (南から)



No.51 埋戻し後

林谷遺跡



No.52～54周辺（南から）

桜区



No.52（南から）



No.52 人力掘削



No.52 埋戻し



No.53 機械掘削



No.53（南から）



No.54 調査風景



No.54（南から）

林谷遺跡

桜区



No.55 草刈り



No.55 (南から)



No.56 調査準備



No.56 (南から)



No.56 溝・ピット検出状況



No.56 実測風景



No.57 人力掘削



No.57 (南から)

林谷遺跡

桜区



No.58 (南から)



No.58 断ち割り (南から)



No.59 人力掘削



No.59 (南から)



No.60 機械掘削



No.60 (南から)



No.61 (南から)



No.61 埋戻し

林谷遺跡



No.62 機械掘削



No.63 人力掘削



No.64 (南から)



No.65 ~ 68 (北から)

桜区



No.62 (南から)



No.63 (南から)



No.64 埋戻し



No.65 (南から)

林谷遺跡

桜区



No.65 遺構検出状況



No.65 実測風景



No.66 人力掘削



No.66 (南から)



No.67 機械掘削



No.67 (南から)



No.68 (南から)



No.68 埋戻し終了 (南から)

林谷遺跡



No.70 人力掘削

桜区



No.70 (南から)



No.71 (南から)



No.71 断ち割り



No.72 周辺 (北東から)



No.72 (南から)



No.73 (南から)



No.73 断ち割り

林谷遺跡

桜区



No.74 人力掘削



No.74 (南から)



No.75 (南から)



No.75 埋戻し終了 (南から)



No.76 人力掘削



No.76 (南から)



No.77 機械掘削



No.77 (南から)

林谷遺跡



No.78 (南から)

桜区



No.79 (南から)



No.80～83 周辺 (南西から)



No.80 (南から)



No.81 機械掘削



No.81 (南から)



No.82 草刈り



No.82 人力掘削

林谷遺跡



No.82 (南から)

桜区



No.82 北壁



No.83 調査風景



No.83 (南から)



No.84 (南から)



No.84 埋戻し



No.85 (南から)



No.84・85 周辺 (南東から)

林谷遺跡

桜区



No.86～90 周辺 (西から)



No.86 人力掘削



No.86 (南から)



No.86 断ち割り



No.87 (南から)



No.87 ピット



No.88 人力掘削



No.88 (南から)

林谷遺跡



No.89 調査準備

桜区



No.89 (南から)



No.90 機械掘削



No.90 (南から)



No.91 人力掘削



No.91 (南から)



No.91 北壁



No.91 埋戻し

林谷遺跡



No.92 遠景 (南から)



No.93 遠景 (南東から)



No.94・95 周辺 (南から)



No.95 機械掘削

板坂区



No.92 (南から)



No.93 (南から)



No.94 (南から)



No.95 (南から)

林谷遺跡



No.96 人力掘削



No.97 (南から)



No.98 (南から)



No.100 人力掘削

板坂区



No.96 (南から)



No.98 草刈り



No.99 (南から)



No.100 (南から)



北工区 試掘確認調査出土遺物



北工区全景

狐塚遺跡空中写真



1区上空から南側



2区上空から北側

狐塚遺跡空中写真



狐塚遺跡上空から西側（七種川上流部）



1・2区空中写真



1区空中写真



2・3区空中写真（南上空から）

狐塚遺跡1区



調査前（北東から）



機械掘削



機械掘削



人力掘削



上面北半全景（西から）



上面北半全景（東から）



SA01（北から）



SA02（東から）

狐塚遺跡1区



SD01 アゼ (東から)



SD01 (東から)



SD01 (北から)



SD01 (西から)



暗渠 (南西から)



調査風景



SX07 アゼ (南から)



西壁

狐塚遺跡1区



上面空中写真（南上から）



上面空中写真（西上から）



狐塚遺跡上空から北側



狐塚遺跡上空から南側



SX12 アゼ（南東から）



SK16 断面（南から）



SX13 アゼ（南から）



SX13 調査風景

孤塚遺跡1区



SD15 アゼ (南から)



SD17 アゼ (西から)



SK20 断面 (南から)



SK21 断面 (南から)



SX10 アゼ (東から)



SX10 (東から)



SX13 アゼ (南から)



SX13 南壁

狐塚遺跡1区



SX14アゼ (南から)



SX16アゼ (南から)



SX18 (東から)



SX19アゼ (東から)



南壁



下面全景 (北西から)



下面全景 (西から)

狐塚遺跡 1区



下面全景 (南西から)



下面全景 (南東から)



SX13 周辺 (南から)



SK22 (東から)



下面空中写真 (西上空から)

孤塚遺跡2区



調査前（西から）



調査準備（草刈り）



機械掘削



調査風景



西壁



SX01 アゼ（南から）

狐塚遺跡2区



北壁



SX04 断面 (南から)



調査風景



SX06 断面 (南から)



SX07 断面 (南から)



SX08 断面 (南から)



SX09 断面 (南から)

狐塚遺跡2区



SX10 断面 (南から)



調査風景



南壁



全景 (西から)



全景 (南から)



全景 (北から)

狐塚遺跡2区



全景（北西から）



SR11 調査風景



SR03（南から）



SR03（北から）



SR11・12（東から）



SR11～13（南から）



SR11 アゼ（西から）



空中写真

狐塚遺跡2区



空中写真



空中写真（西上空から）



空中写真（東上空から）



空中写真（北上空から）

狐塚遺跡 3区



調査区遠景（西から）



機械掘削



人力掘削



南壁



東壁



調査風景

孤塚遺跡3区



全景（東から）



全景（北から）



空中写真



空中写真（南上空から）

狐塚遺跡4区



調査前（北西から）



機械掘削



北壁



P1断面



地震痕跡（液状化）



調査風景



SD01 アゼ（東から）



SD01（東から）

狐塚遺跡4区



旧河道 (西から)



柵跡 (東から)



調査区北半



調査区南半



西壁



空中写真

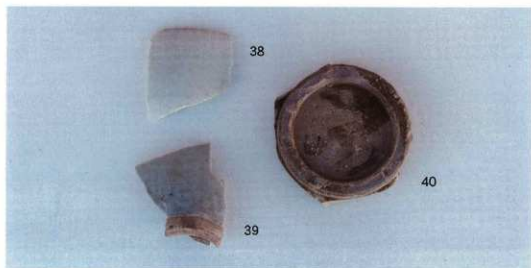


空中写真 (北上空から)

孤塚遺跡



狐塚遺跡



加治谷藪下五反畑遺跡



加治谷藪下五反畑遺跡空中写真



加治谷藪下五反畑遺跡空中写真

加治谷藪下五反畑遺跡



加治谷藪下五反畑遺跡空中写真



加治谷藪下五反畑遺跡空中写真



加治谷藪下五反畑遺跡空中写真

加治谷藪下五反畑遺跡



A区全景（南から）



A区全景（北から）



A区北側（西から）



A区縄文時代土坑（北から）



B区全景（南から）



B区全景（北から）



B区北半（南から）



SR01 堆積状況

加治谷藪下五反畑遺跡



SH01 検出状況



SH01



SH02



SH02



SH02 カマド



SB01 (北から)

加治谷藪下五反畑遺跡



SB01 (東から)



SB02 (北から)



SB03・04 (南から)



SB02・05 (北西から)



SB06 (南から)



SK01 (南から)

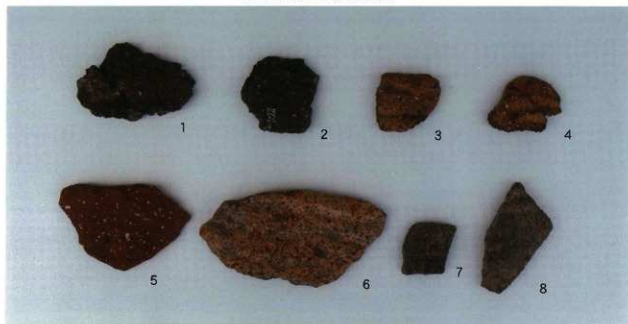


遺跡説明看板



現地説明会

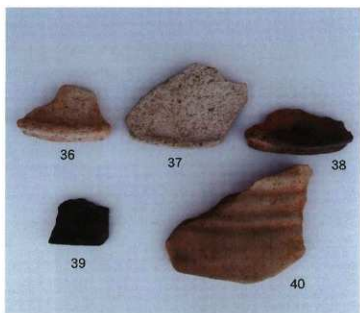
加治谷敷下五反畑遺跡



加治谷藪下五反畑遺跡



加治谷藪下五反畑遺跡



加治谷藪下五反畑遺跡



加治谷藪下五反畑遺跡



2021年3月31日 印刷

2021年3月31日 発行

埋蔵文化財調査報告書

狐塚遺跡 加治谷蔵下五反畑遺跡

福崎町埋蔵文化財調査報告 21

編集・発行 兵庫県神崎郡福崎町南田原3116-1
福崎町教育委員会

印刷 クリヤ印刷所



